

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第七十卷 第四号



4

日本幼稚園協会

日本保育学会監修

日本保育学会発足20周年記念出版

保育学講座

全10巻

フレール館

★保育の原点をさぐる全10巻

ユニークで正確な資料に基づいて執筆されたこの全集は、従来の保育学に科学的な基礎づけをしたものとして高く評価されております。このご好評におこたえし、フレール館では全巻完結記念特価セールを実施中です。この機会に、お手もとにぜひお備えくださるようおすすめします。

A5判・上製本・ケースつき

★全巻完結記念特価

各巻定価・1200円

セット定価・12000円

一時払特価・10000円

分割払特価(5回払)・11000円

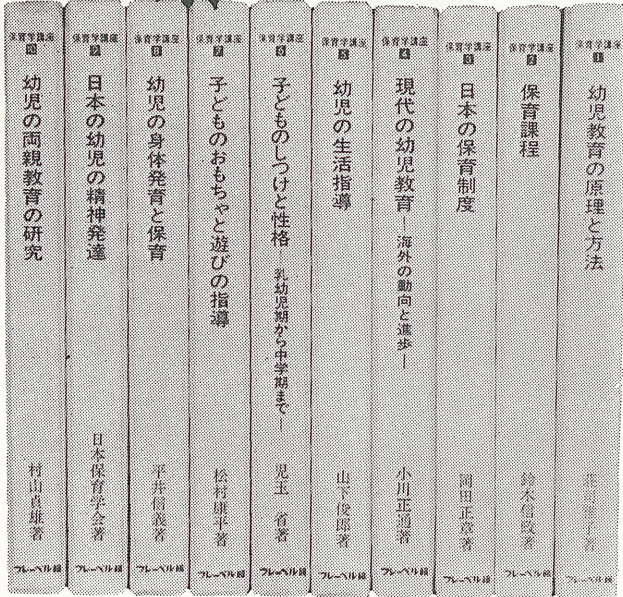
分割方法

第1回・3000円

第2回より・2000円×4回

●申込締切日 昭和46年5月末日

全巻
先渡しセール
実施中!



幼児の教育

第七十卷 第四号





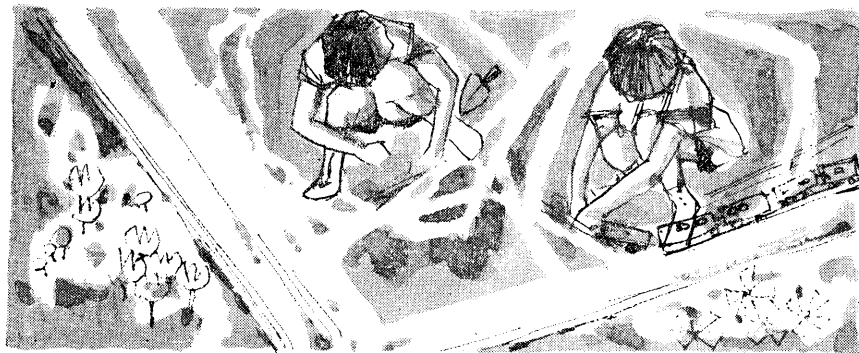
幼児の教育 目次

第七十卷 四月号

表紙 小野木 学
 カット 斎藤 信也

★講演

- 現代の幼児教育……………周 郷 博(4)
- 中教審の「試案」から「中間報告」へをめぐって……………岡 田 正 章(20)
- 子どもの文化(その一)……………本 田 和 子(26)
- 児童文化にかかわる子どもの役割……………堀 合 文 子・平 野 信 子(32)
- 入園期……………堀 合 文 子・平 野 信 子(32)



★ユートピア・現場の夢とためいき……………守永英子…(38)

日本人の自然観……………太田次郎…(40)

手先の動きと子どもの感情⑩……………清水エミ子…(45)

ちえおくれの幼児と幼稚園……………水田順子…(54)

★こなな本・あんな本……………津守真…(58)

都市化と幼児(1)

遊び場のあり方……………塩川寿平…(60)

オメツプについて……………西本脩…(70)

現代の幼児教育

周 郷 博



七年前に亡くなった沖繩生まれの、山之口獏という詩人がいますね、獏さんは人の話によるとこの私を大変尊敬していたんだそうです。僕の方から見ると、僕を一番親しく感じていたということは実感として持っていました。山之口獏は本当に貧乏で質屋通いばかりしていた。「おわい屋が詩をかいているんじゃないか」と、詩人がおわい屋も兼ねているんだ」といって、おわい屋もやっていました。僕は、そういう、ぎりぎりのところで人間がもっている矜持きんぢが、大変好きなんです。

獏さんが死ぬ日の午後三時頃、僕は「母と子の詩集」ができたんで、それを持って病院へ行きました。獏さんが、「米い」って言うから行きました。足なんかは、さわったらもう冷たくなって死んでいました。そばへ行つて、耳をつけたんだな。そしたら、いっしょうけんめい「ぼくはね、詩人として、きたえた魂で生きてきたんだよ」といいました。それだけというのが精一杯で、それ

をいったら、日が上の方へあがってしまいました。獏さんの、この世に残していった、そして僕にいった最後のことばです。

その日、僕は、いなかに用事があつて、いなかに行って、お月さまをみていました。見ているうちに、電話がかかってきました。今、亡くなりましたって……。その獏さんの詩を最初に読みたいと思います。「座ぶとん」という大変いい詩です。

土の上には床がある

床の上には畳がある

畳の上にあるのが座ぶとんで

その上にあるのが楽という

楽の上には 何にもないのであろうか

どうぞお敷きなさい

どうぞお敷きなさいとすすめられて

楽にすわった寂しさよ

土の世界を、はるかに見下しているように

住みなれぬ世界が寂しいよ

この詩を、僕ほとんど暗記しているんですけども、ゆうべ、またじっと見て考えていますとね、土の世界から人間が、あんまり離れてしまいましたよ。 「土の世界をはるかにみおろしているように、住みなれぬ世界が寂しいよ」ということを、獏さんは実に泣きそうな声で朗読したんだけど、今、僕らにはそういう気持があるでしょうか。この土の世界を、故郷でもいいですけれども大自然でもいいですよ、場合によっては神でもいいですよ、先祖でもいいですよ、 「住みなれぬ世界が寂しいよ」——ぼくら、こういう感覚をもっているでしょうか。

子どもだった時分からずっと離れちゃってさ、そして人間の嫌いな公害や何かで汚染したこの世界にお金だけがものをいってるとような世界に、住みなれぬ世界が寂しいよ、というふうに言いかえてもいいね。人間が、子どもから仕方なくおとなになるんですけどね、人間が、おとなになることは寂しいことです。成長していくことは、得ることだけでなく、失っていくことの方が多いわけですよ。

僕は、このとしになって幼稚園の園長なんかにさせられてね、僕はならなければよかったですよ。やっぱり子どもの頃

の方がいいな、放っておいたって、子どもは成長しますよ、いやらしい、おとなになっちゃうんですよ。ヨーロッパでよくことわざのようにいうけれども、成長するってことは、得ることよりも失うことの方が多いんです。それをね、失ったものには気づかないでね、得るものだけあるようにキョロキョロ探して歩いているんだね。

現代の日本人は、獏さんが「座ぶとんの上にあるのが楽という」といっている。その楽におぼれているのね、楽しか考えていないんだね。そこに、何も疑問を持たないんだね、根があがっちゃってるんだね。

高度成長経済なんて、いい気になってるけどね、僕は地獄のような気がしますね、実体は地獄ですよ。しかし、楽だと思ってる、楽なら何でもいいと思ってる。そしてこの獏さんのように「楽にすわった寂しさよ」というふうに感じる人は、ますます少なくなっていますよね、感じてはいるけど、そんなことを感じていたら競争に勝てないと思ってるんです。

そこで、まず現代というのは、一体何であるのか、そして現代というのが、どういうものであるのか、一九七〇年代というのはわれわれ日本人にとって何であるのか、そのことについて話をしようと思っっています。

最初に三冊の本を紹介したいと思います。一九七〇年代を日本人が考えるために、スウェーデン人や、ドイツ人や、フランス人

が書いてくれたような本です。最初に読んだ本は、ロベール・ギランという人の書いた「第三の大国日本」という本です。二冊目に読んだのは、スウェーデン人で、ホーカン・ヘドバークという人の「日本の挑戦」という本です。そして最後に読んだのは、ドイツ人、ハンス・パーレンフェルトという人が書いた「一億人のアウトサイダー」です。

ロベール・ギランという人は、日本に一番長くいた人で、奥さんは日本人です。スウェーデンの人も奥さんは日本人です。最後に読んだ「一億人のアウトサイダー」を書いたドイツ人は、日本に最もわずかしこ滞在していない人ですが、見方は大変おもしろい。何かを考える場合に、この三冊は基本図書だと思います。

そういう大局に立って問題を考えないとね、小さな視野しかもてないね。そしていっしょけんめいやつてるようだけど、みんな人に吸いとられちゃってね、自分のやっていることは無駄だったということになりますからね。大きな視野に立って自分の小さな部分を考えなきゃなりませんよ。

幼児教育に熱心だからということはいいことですけどもね。しかし、その小さな部分で興奮していても、それが全体としてどういう意味があるかね、もつといえ、人類の問題は地獄と宇宙全体のものとして考えなければならぬとこへ来てしまっているわけですよ。そういう意味では、教育に熱心であることは、その人の良心を信じますけど、それだけでは無駄なことをしているこ

とになるかもしれないということを考えざるを得ないんです。

僕は、最初このロベール・ギランを読んでまして、そうではないかと思っていたことがはっきりしてきましたね。それはね、戦後の日本には、政治家というものはいないということですよ。つまり、世間で政治家とよんでいるのは、企業家たちの番頭さんたちである。現代の日本で、人間らしい親身をもって教育を考えてくれるような政治家はいないということを、まず、われわれは知らなきゃいけない。

ロベール・ギランの本の中で、もうひとつ重要な問題は、日本は経済大国になっていますけど、日本の資本家は蓄積した資本をもっているわけじゃない、国民がたえず、いろいろなものを買って、預金したりする、そういうもので資本が成り立っているんです。資本そのものが、大変基礎のないものなんです。

第三番目に現代の日本の産業の独特な点は、第三次産業が非常に多いということだね。政府が企業家といっしょになって、大國になるうとしていくわけですけど、日本の産業の土台のもろさを現わしているのは、第三次産業、つまり娯楽とか映画、享楽施設、観光事業、デパートが多いことだね。ロベール・ギランは、失業すべきものが一時保っている状態だとみてますよ。

このロベール・ギランの本で、もうひとつ心に残っているのは三冊ともに共通していますが、「政府もそうだけど国民もまた走っていないと負けてしまう」という心理をもっているらしい。いつ

でも走っている人が勝つ、別なことばでいえば、進歩ということ
を信仰しているのかな、何でも、人より先に出ていた方が得だ」
といていることだね。しかも、金にならなきゃいけないんだよ
ね、そういうことがわれわれの、毎日の生活の軸になっているわ
けですよ。

それが教育というものを競争の場にしてしまいましたよね。テ
スト、受験という競争の場にしたね。戦後は、みな大学に入ると
いうことで大学に入る競争をしてくるわけです。それが幼稚園の
方まで荒廃した状態にし、家庭の中で破壊してしまいました。

このスウェーデン人が書いた「日本の挑戦」では、やはり共通
して日本が経済大国になるといことは、明治から百年の間に、
軍隊を先頭にたてて中国や朝鮮を侵略して軍事的な大国になったの
と同じように、戦後は経済大国になることを考えたとみている。

しかし、この人は、スウェーデン人ですし経済学をやった人で
すからちょっといい方がちがうんです。「経済大国になるために
はすべてのものを犠牲にして、社会福祉なんでものには鼻もひっ
かけない。水俣病で苦しんでいようがちょっとごあいさつしてお
けばいい、日本は勝つことばかり考えているけど勝つということ
がそんなにいいものですか」といっています。

「日本が、経済大国になるのを、世界の人々はうらやんでいる
わけじゃない、じゃましようというわけでもないけれど、日本よ
幸いあれ、世界は、嫉妬ではなく賛嘆をもってあなたをみつめて

いる。ぜひわれわれの世界の一部になってもらいたい、勝利は最
も大切なものではない。いかにゲームをプレーするかのほうがはる
かに大事なのだ」ということを序文で書いています。

人を追いぬいて勝利を得るといのは僕らの中にあるでしょ
う。だから、日本国としても、日本人のサイコロジとして当然
あるんだな。なぜ、そう勝ちたいんでしょね、問題は他に教育
の問題も、社会福祉の問題もあるわけでしょう。

このスウェーデンの人も、皮肉みたいですけどね、こう書いて
います。「私は、二十四歳という青年期に日本に来了。一九六四
年から六八年の間スウェーデンですごしたのを除けば、四十歳に
なって日本を離れ、再びヨーロッパ人に戻るまで日本で暮した。
今後二十年の間に私は、日本の欧州舞台への決然たる登場を研究
する楽しみを与えられることになるだろう」日本が経済大国とし
てどんなことをするかだね。

「しかし、私はひとつの夢を抱いている。それは、私の日本人の
妻といっしょに、一九九〇年か一九九五年に日本に住みたいとい
う夢である。一九九五年に空は青々としているだろうか。一九九
五年までに歩道はできあがっているだろうか」ともかくこれは皮
肉なんですけど、日本の自然破壊はえらい速度で進行しているん
です。スウェーデンの空なんかとまるつきりちがうんです。

新聞にこういうのが出てたでしょう。イギリスの船会社の人た
ちが日本を非難しているんだけど、世界じゅうの海を汚している

のは日本のタンカーなんだそうだ。コストを安くあげるために、新しい油を入れる前に古い油を海の下にすてちゃうんだって。これは、日本人が自然というものに甘えてる気持があるためなんですよ。自然というのはどんなにひどく汚れたものをすてても、いつか浄化してくれるという事は、かつてありましたよ。ところが世界じゅうの海を、日本のタンカーは荒らしているんだね、油だらけにしちゃってるんですよ。この非難は、当然の非難だと思うのです。

今年、イギリス人が大西洋を渡ったでしょ。そしたら、大西洋のどこにも油があるそうだね、あの油も日本人が汚したんじゃないかな。日本人というのは、自分のことは考えるけど、何かに甘えていて社会全体的なものを持ちあわせていない人間ですね。海を汚しているのもそうだし、国内をみてごらんさない、ゴミや何かをすててる、すて方をみてごらんさない、あれもやっぱり同じものですよ。一步外へ出たらどんなにきたなくてもいいんだ。社会全体的な気持がまったくないんだね。

このスウェーデンの人が書いてますけど、ベトナム戦争でもうけていたのは日本だけだそうだよ。アメリカだって損しちゃいましたね。それに国連に加盟している国だって、いい悪いは別として、兵隊を派遣したりして犠牲をはらっているわけですよ。日本だけは、ちゃっかりもってかいていたんです。僕、これ恥ずかしいな。しかし、これはベトナムの問題だけじゃないんですよ、国

内で同じようなことやってる人がいるんですよ、ちゃっかり金もうけやってるんだね。

今度は、「一億人のアウトサイダー」っていう本ね、最後の方に教育とかなんとか大変おもしろい問題があるんです。教育勅語なんていうのはね、ヒットラーの「わが闘争」みたいな激しいことは書いていないのにそれをなぜ占領軍が禁止しなければならなかったか、あのくらのことは普通のことだっていつているんですよ。しかし、日本人は、特殊な人種でね、言外に変な民族だそうだね。そういう意味では、やっぱり危険かもしれないんだね、教育勅語も。

日本人は、ことばというものに酔う性質をもっているそうだね。戦争中は「大東亜共栄圏」とかね「八紘一宇」とかいうことばがあって、こういうことばは日本人にとって魔術的な作用をもっているので禁止されたんだそうだけれども、戦後は「平和」と「民主主義」だね。

「天皇制がなくなつて、今やそういうことばは、役目をおえたお守り札が片づけられたのと同じように、わきへ片づけられてしまった。天皇制イデオロギーの崩壊以後、日本人の心の中の空洞ができて、さらにその空洞は、ことばのおまじないみたいなものを必要とした」わけよね。戦争に負けてからは、西洋製の思想的まじない、ことば、ペールをかけられたような、そういうことばが必要になつてきたんだね。それが、平和とか民主主義とかいう

ことばなんだね。

「平和とか民主主義とかいう概念が口にされるのも、何よりもそれが人気があってよく広まっているからであって、その世界観としての内容を強く信じているからではない」んだ。だから平和とか民主主義とかいうものを、ことばのおまじないとして、うまく利用はしていくんですけどもね、しかし、それはいったい何であるか、本体をつきつめようという気はないんだね。そこにすでに危険が顔を出しているわけですよ。

この人がいつてるように、「もう、こうしたことばが、いつの日か自らによせられている期待を満たさなかつたり、いざという時に効き目が弱いということになれば、人を幻滅させた戦争中のお守り札と同じように、頭の中からぬぐい去られてしまうこともあり得ることだろう」平和とか民主主義とか本当に考えてそういつてるんじゃないんですからね、そんなものは、すぐすてちゃうだろうという警告をここでしていますよね。その危険は、僕は十分にあるだろうと思いますね。平和とか民主主義なんて役に立たないというふうには、すぐにいなおる危険性を、日本人は十分に持っていますよ。そしてまた、いなおらなければならぬ状態に、今、来ているんです。日本人は、何かそういう平和とかなんとかいことばを、ずっといつていると、平和になってくるような気になるんだそうだね。たばこの中で、ピースとホープがよく売れたそう。平和とか希望とか唱えていると、来るような気がしている

んだそう。これは、日本人が、ことばというものの実体を本気で考えようとしているんじゃないかと、おまじないに使ってるんですよ。

経済大国になるということで、公害問題は、まさに救い難いほど、この美しい日本の自然を破壊しています。ジェット機をひとつ飛ばしただけで、空気が高層でうんと汚れてしまうわけですよ。しかし、空気が汚れたり、水が汚れてしまったりするのと同じような速度で、人間の心というものが汚染してしまっている、どんどん汚染していくわけですよ。これも、恐いものだと思うんだね、どんなに経済大国になってみても。しかも経済大国は今や、非常にあやしくなってきましたよ。ここどころが、このドイツ人が書いている最後の部分で、中国との関係なんですよ。佐藤栄作が、わざわざサイゴンに立ち寄ったことは、アジア歴訪のクライマックスとして多くの注目をあびた。それは、あらゆる側から、たえず批判されているサイゴン政権にとって、精神的な背面援護を意味した。アメリカと同盟関係にある西ヨーロッパのどんな政治家も、このような援護をあえてしたことは、いまだかつてなかった。これにはね、中国で原爆ができたんでね、日本も原爆を持たなければならぬと書いてある。彼の考えでは東南アジアというものを、中国といっしょに争って、東南アジアを支配圏におこうというのが腹で、ヨーロッパの政治家ならやれないことを、佐藤栄作はやったというふうには、ここに書いてあるわ

けです。

これは、この人の見方なんですけれども、『日本の政府首班は、北ベトナム爆撃の無条件停止に反対であると発言し、ジョンソン大統領とタカ派陣営に身を投じた。日本は、突然アデナウワー・ダレス時代のドイツに劣らないほど、ワシントンに対して、忠誠になったように見えた』僕は、こういう危険をおかしても、この高度経済成長を保たしていかなければならないような条件も、あるんだと思うんです。つまり、日本の経済がいつガタンときてしまうかわからないわけですよ。だから僕はやっぱり、日本の政治家というのは、大変なんだと思うんです。

そして、この人は、むしろ学生運動をやっている人たちに対して、同情的な態度をとって書いているんですよ。日本の現在の社会体制と政府決定の責任をもっている政府というものを非難することは簡単ですけどね、問題はそんなに簡単ではなくて、われわれもまた、同罪なんだと思いますね。日本の経済が、大変危険なところへ来ていることも、僕は確かだと思っています。

七億の中国人と、一億人の日本人とがいて、七億の中国人の生き方と、一億の日本人の生き方とがあるわけですけども、『日本人は、国家公務員的であり、プロシヤ的であり、軍人的であり、いわば士官候補生的である。中国人は、放浪者のであり、ナポリ人的であり、人民的であり、いわば下士官的である』『日本人は、まじめで、仮面をかぶっており、胃かいようになりやすい』

だいたい、日本人は、まじめだけど、仮面をかぶってるよね、胃かいようになりやすいということは、すぐ腹がたっちゃうことですよ。理性を失いやすいんですよ。『日本人は、熱狂的な意志の人で、七億の中国人は、忍容の人である』この、熱狂的な意志ね、これは、確かに、日本人にあると思うんだ。景気がいい、景気をつけるなんてね。『中国人は忍容の人である。その微笑の生活のちえで、彼らは世界で大きな同情をうけるのに対し、日本人は、ドイツ人と同様に驚嘆はされるが愛されない』これは、僕、確かにあると思うな。

一番、最後のことばですけども、日本人は、今、経済的にもどっちの道を行ったらいいのかわからない。経済的には、世界からきらわれているんです。そしてね、アジア人にもなれないんだね、中国はアジア人としての道を進んでいるというんです。日本人は東洋と西洋の両方をとり入れていかなければならないんだね。『だから、自分自身で、あれかこれかと決められないことは、いぜんとして、その宿命である』つまり、中国の七億の人の動き方とはちがうんですね、自分で決められないんですよ。世界の中の日本として生きていくよりしようがないんだね。『日本のように、はじめから孤独を宣言されている国は、ほとんど他にはない』『孤独な国ですよ。そして、この孤独な国の中の人間であればなおさら愛される日本にしなければならないよね。そして孤独でなく、世界と共存していける資格を、日本は持たなければなら』

ないわけです。

そういうところに教育というものがあるはずなんですけども、ロベール・ギランやその他の人も書いてるように、日本の教育を本当に考えている人はいないんです。日本にそういう政治家はいなくて行政官しかいない。それでは、誰が教育を考えなければならぬんでしょうか。一九七〇年代に、国民がここで教育という問題を、本気になって考えていかなければならないと思うんです。

この三冊の本は、日本というものを、フランス人、スウェーデン人、ドイツ人に理解させるために書かれた本ですが、一九七〇年代の日本が、どの道を選ぶべきかということ、われわれに教えてくれている本だと思います。

人間は、ことばというものを持っているわけですから。そのことばによって、人間は人間となっているわけですから、ことばがこのくらいにごってきてしまうと、ことばは今や、生命を失っているわけです。われわれは、人間である限り、この肉体の中に、ことばが宿っていなければならぬ。そうでなければ、肉体はもたないわけですから。

個人の肉体がそうであるばかりでなく、社会の中の物質的なものも、ことばが宿ることによって、その物質が人間の精神を支えることになるわけですが、現在は、物質によって精神が破壊されています。

今の日本の教育は、教育制度ということで、教育であるような

顔をしていますけれども、これは、もはや教育ではないんです。現代の大学なんていうのはね、やめてしまつて公園にでもした方がいいと思えますよ。

モンテッソリーが、精薄の子どもの教育をやっているうちに、ふつうの子どもの教育はまちがっているということがわかつてきた。そして、イタリーで迫害をうけ、インドへやってきてタゴールと親しくなるわけですよ。日本の教育の制度は、明治からずっと作られたものを、敗戦によって急に変えましたけど、日本人は、本当に考えて変えたんじゃないんだ。おまじないみたいなもので変えたんだね。実は、朝鮮戦争を契機として、あらゆる犠牲を国民にかけても、経済大国になるという道を選んだのです。大変危険な橋の上のつかっている状態の中で教育というものを根本的に考えなおさなきゃいけないんです。

矢沢宰君の「光る砂漠」という詩集があります。

矢沢君というのは、四年前に二十一歳で死んでしまった人です。彼の詩や日記を読んで、八十七歳の内藤濯先生が大変興奮して、『君は、えらい問題をしょっている。僕は、十数年前、「星の王子さま」とめぐりあっただけけれど、「星の王子さま」と共通した大きな問題にぶつかっているんだ』というふうに僕のところへ電話してくるんです。僕はああいうとしをとった人とか貧乏で世間から無視されそうな人、えらい人よりもそういう人と関係がついてくるんだね、世間的には不幸だといわれている人だね。

矢沢君のお母さんも「死んだ宰が、先生のような人にみてもらいなさい」といっているような気がして「詩を僕のところへ送ったんだ」といふんです。どうも僕は、子どもの時から、そういう運命をせおってきているような気がします。

今の教育というのは、全体として形だけはあるけれども精神はなくなっちゃったわけね。それは、経済成長というものの中でやっとな維持されているというものです。教育の制度全体が七〇年代に役割を果たすことのできるものではないんです。制度として認められている教育ではないところで、本当の教育がおこっているということを感じます。

ルソーでも、ベスタロッチでも、フレイベルでもそうですよ。今や、世の中があまりひらけちゃって、できあがってしまったているものは生命を失っているわけですから、こういう時代に、本当の教育は人の気がつかないところで、始まっているんだということを感じます。矢沢君の詩と日記は、こういうことを語っていると思います。

矢沢君は、八歳の時から腎臓結核で、ひとつ腎臓をとってしまった。おじいさんとおばあさんが農業の仕事をしているんですけど、お父さんはやはり結核なんだな、家は貧乏で、お母さんが一人で暮しをたてていたのですけれどね。そして十三歳まで小学校にいますが、小学校の五年生までしか行っていないで、一年おくれで形だけ卒業するのです。その時は、もうひとつの腎臓もひ

どくなってしまうて結核病院にかつきこまれるのです。

小学校五年生しかいっていないのに、どうしてあんなにきれいなことが出てくるのか驚くべきことだね。それは、生まれつきというふうにかえらたってその解釈にはならない。環境かという環境でもその説明にはならないです。きのう自動車の中で内藤先生はうまい説明をしましたが「矢沢君は、自分の心の中に学校をもっていたんじゃないだろうか、生まれたときからずっと、心の中に学校をもっていたんじゃないだろうか」そういうふうにかえるより仕方がない。

ところが、今、ふつうの子どもたちが育つ環境はどうですか。そもそも、家庭で、一人の人間になる初期の教育、たしなみという意味の教養がなされないで、人がかりでしょ、あそこの幼稚園に入れればいいのか、あそこの小学校がいいとかね。人がかりにしている所は、教育なんてない所なんです、入ってれば入っているほどよくないんです。

それまで、寝たきりでしたけど、矢沢君は十七歳の時から立てるようになりましてね、病院の中に付設されてある中学部に入っ、手押車で行って、いっしょうけんめい勉強しようと思いましたが。そして二年で中学校を卒業して試験をうけて高等学校へ入るんです。ちょうどその頃に体の具合がたまたま少ししい具合になってくるんです。それで退院して一年半、高校へ通うんです。学校へ行くようになったら勉強がおもしろくなっちゃうんで

す。矢沢君の日記がここにありますが、学校というところへ入ると、勉強する気があんまりなくなってくるのね。それをね、今、幼稚園からそういうふうには、あおっているんですね。

これは、どういうことでしょうか。学校というところは、本当に勉強しようとする気持をこわしてしまうところなんですよ、知識に対する発見と、おどろきをなくしてしまうところですよ。

お金というものも、そういう心を人間の心から失わしてしまうのです。何不自由なく暮らしていたりするということが、まぢがっているんですね。貧乏の方がいいんです。貧乏で、生きるという重荷をまると自分にひきうけている方が、勉強するということがおこってくるんですよ。

八十七歳の内藤先生は、「光る砂漠」を読んでまして、非常に感激しましてね、先生自身が、矢沢君をたたえる詩をかいたんです。これが、実に若いんです。内藤先生は、「星の王子さま」と共通している部分をこの詩に感じたらしいんです。

これは矢沢君の十五歳の時の詩なんですけど、

おれの中に もう一人 すばらしい 人間がいて……

そいつと しつかり 手をむすんで

生きて 行きたい

おれの中に、もう一人すばらしい人間がいてだね、それが、サ

ン・テグデューベリにとっては、砂漠で会った星から来た王子さまが自分の中にいるもう一人の自分なんです。だから、自分の中で対話しているわけです。しかし、十五歳の、小学校五年しか行かない子がね、そして貧乏で病気で、不幸な少年が、どうしてこういういいことばをいえるんでしょうかね。

この本では、その前に、「ぼくから」という詩を出しています。彼は、その前には死んだ方が楽だと思っていましたけれどね、十五歳になって生きたいと思うようになりましたよ。たとえ、わずかな時間しか生きられないとしてもね、十五歳になって生きていることには、何かがあるはずであると、心がかわつてくるわけですよ。その時の矢沢君の決心をかいたのが、この「ぼくから」という詩なんです。

僕から イエス様を とり去れば 僕は灰になる

僕から 詩を とり去れば 僕は灰になる

死んじゃうなんていわないところがいいでしょ。十三歳の時の十二月二十四日に、イギリスの宣教師が病院に来てるわけですよ。その頃に、彼は初めて生きたいと思うようになるんです。この詩は、彼の生きることに ついての、宣言なんです。イエスさまにすがりつきたいという気持が一方にありますね。もうひとつ、自分の責任を出してくるわけです。僕から、詩をとり去れば灰

になる」というのを、あわせていつてるんだよね。詩というのは、自分でかくものです、人間がやるべきことを自分の責任として出しているわけだよ。

十四歳の頃、一人でねたつきりて、鏡でしか外をみれないんです。そして、いつ死ぬかもわからないという、十字架にかけられどおして生きてるわけよね。誰も来てはくれないわけでしょ。その当時にかいた詩を読むとね、僕は今でも涙が出る。「感謝」という詩があります。

とにかく素晴らしい夜だった
ガラス窓に

春の淡い月の光が射しこみ
どこか遠くで

九時を知らせるオルゴールも
鳴っていた

これだけで僕は満足した
細い指をしつかり組んで

深く深く神に感謝した

熱い涙が耳たぶをつたって

枕の上にポトリと落ちた時

僕はがんばるぞ！ と思った

十四歳なんていう年齢はね、こういう決意をすることのできる年齢ですよ。そして、この次に「春の夜の窓はあけて」というのがありますね。

電気はつけないことにしよう

窓は開けておくことにして

春の夜の清く甘すっぱいような香りを

部屋の中いっぱいにして

そして俺は

静かに神様とお話をしよう

この頃は、神さまということで彼の命もっているわけですよ。これは、さっきいった、平和とか民主主義とはちがうんですね、この時に矢沢君がいつている神さま、「俺は 静かに神様とお話をしよう」といつている時の神さまはね、そんな、ちゃんなことばじゃないんです。

「早春」というのがあるんですが、これは十五歳になった年の五月にかいたものです。人間が生きているという決意をした時は、本当に危機というものがあるから、生きる、生というものが張りをもってくるわけですよ。一度、死をくぐってこない生なんて汚れる一方ですよ。

人は何度も死ななきゃいけないと思うんです。その時には、自

然がふつうの人の目でみるのとはちがってくるんです。ふつてくように、美というのがわかってくるのよね。この「早春」という詩を、はじめて読んだ時、驚きました。僕ら、みんなこういう経験しているはずなんだけどね、見えない人には見えないんです。見えたところでことばにはならないんですよ。

雀の声のかわったような

青い空がかすむような

ああ土のおいがかぎたい

その春にはおずりしたい

何を求めていいのやら

ああ土の上を転げまわりたい

きつとしまっているような

淡い眠りの中の夢のような

生きなければいけないけれど

何だか死んでもいいような

去年の春女がくれた山桜

まぶたの中に浮かぶような

この矢沢君には模倣がないでしょ。この秘密はどこからくるんでしょうかね。心の中に学校をもっていたんだといういい方ではないようながね、どこかで学んだわけじゃないんですよ。

そして、もっと前の十四歳頃に「あきらめ」という短かい詩をかいています。僕は、日本国民がいつしよにこういう決意をしなればいけないと思うのです。

あきらめてはならぬものを

あきらめて

あきらめてよいものを

あきらめず

こんなのがわたしの

なやみのたねになっているのでしょうか？

この頃に、矢沢君は、生きるという決意を本当に純粹な形でしますよ。わずかしか生きられないにしても、生きるということは意味のあることだという。そこで、生きるということは、あきらめちゃいけないということを、自分にむかっていっているわけですね。

日本国も、こういう決意をするべきじゃないでしょうか、あれも欲しい、これも欲しいじゃ、何もできないんです。何かあきらめなければ他の問題がはつきりしてこないわけですよ。経済成長も欲しいし、平和も欲しいなんてわけにはいきませんよ。お金も欲しいし、人間としての気高さも欲しいなんていったってそうはいかないよね。この矢沢君の詩は、僕らにむかって全体に語っ

ているような気がするんですけどね。僕らの気持は、汚れちゃってますよ。その汚れを払いのけなければやるべきことがはっきりしてこないわけです。

この本では、最初に「ききょう」という詩が出してあります。

おまえは 本当に健康そうだね

つばみは ちよっとさわれば

はじけそうだね

こういうのが、初期の詩です。おそらく、この「ききょう」という詩をかいた頃だと思いますが、その頃いた看護婦さんが、新潟のいなかで生まれた十八歳の代用看護婦で、三月に矢沢君が病院にかつぎこまれてから、十二月まで、誰からもかえりみられない少年、矢沢君の世話をするわけです。

歌をうたってくれることもある。それからクローバーの花をつんできてくれたこともあるんだね、何でもないことなんですけどね。それから、矢沢君がかいた詩をほめてくれたんだね。そういうことで、死の彷徨までどんどんひきずりこまれていた彼は、生きようと決意してくるのですよ。したがって矢沢君は、ずっとこの看護婦さんというものを、天使さまのように美しくみるようになってくるのです。

この人は十二月から、病棟が変わっちゃって、矢沢君はもう会えないんです。その年の十一月三日から、この看護婦さんに読んでもらうために死ぬまで日記をかきますよね。

その日記の文章は、実に死ぬまでいいんです。そして、人間が考えるべきパスカルの観点に似たような問題を、ほとんど全部考えている。文章も非常にいいんだな。どうしてこうなったかという最後の説明はつけられませんよ。

若いから、あこがれて高校というところへ入りましたけど、入ったあとと学校というものは、つまらないものだということをかいていますね。矢沢君という少年の、二十一年間の生涯の中で、現代の学校というものが批判されていると思います。

その頃の看護婦さんの思い出と関係があるのだと思うんです
が、「あなたの手は」という詩があります。

あなたの手は

握りしめるとあたたかくなる手だ

あなたの手は

あたためるとひよこが生まれる手だ

われわれは、そういう手になり得るでしょうか。ジャン・ジャック・ルソーも二百年前にかいていますけど、子どもが、一生涯を決定する場合、どういう女性とめぐりあったかということによっ

て、人生の針路がかわってくるわけですね。そういう女性が必要ですよ。ゲートのようないい方で、永遠の女性といってもいいね。そういう女性が今いるでしょうか。こういう手をもった女性がいるでしょうか、そういうお母さんがいるでしょうか。短い詩ですけれど、幼児教育の中核になるものをいっていると思います。

人間が人間になるために、女性はいかなる役割をするんだろとかということをおっしゃると思います。女性でなくても、日本の総理大臣でも、文部大臣でもいいよね。そういう手をもっていて欲しいなと思いますよね。

それから短かい詩に「まよい」というのがあります。

さわると手のきれいな手とを
心のなかにはって まよいをくいとめた

十六歳の少年が、こういう詩をかいているんだね、矢沢君は十六歳、子どもの頃にこういう糸をもつことはできますね、小さい時に、まよいどおしでおとなになっちゃうんですね。幼ない時代に、こういう手の切れるような糸を心の中に張ることがあっていいわけじゃない。つまり意志決定というものにはね、誰かの暗示でもって、あるいはいい環境の中で幼い時代にこういう糸を張る必要がありますよね。

僕は、教育の出発点は、意志の教育だと思います。意志というのはないんだね、迷いだけでいいんだね、そういうような教育を今やっているでしょうか。初期に、日本の子どもは、何ものにも inspire されることなしに、おとなという怪物になってしまっただけで、乱雑な迷いのかたまりなんですよね、欲のかたまりです。だから、早くおとなになっちゃうね。「子どもは、人間として成長、成熟するひまもなく社会という怪物のえじきにされてしまう」と、ある日、僕はここに書いてますけど、現代の日本の社会を考えたらそうですね。子どもに人間として、成長、成熟するひま、余地を与えてほしいんですね。そういうひまもなく、社会という怪物のえじきにされてしまっただけで、人間は人間にならなければいけないんですね。

今、新潟で洋服屋をやっている、いっしょに病院に入っていて彼の大変親しい親友になっていた人と二人で話したことが、次の長い詩になっています。僕らもこの矢沢君の詩によって教えられているのだと思いますけどね。二人で話したことです。

これから どうなるんだらう？

二人でベッドに ねそべりながら考える

高校へ行きたい

俺達は何もできないから

勉強をやっておいたほうがいい

でも家がびんぼうでなあ……

商売をやりたい

しかしこんな体ではなあ……

結論はなるようになるだろう？……

そしたらそうなった所で

一生懸命やろうと

言う事だった

未来に対して 夢はあるよ

何かは出来ると思う

これまで生きてこられたことは

神が俺達に何か役にたたせようと

思っの事もかもしれないから

そうかんがえれば俺達はなんの力もないようだが

どうにかして生きていけないこともないよう

思うなあ

僕は、この中で「そしたら、そうなった所で一生懸命やろうと

言うことだった」というところは非常によくわかるんですけど

ね。初めから東大へ入ろうとかき、人よりも先に走っての方がい

いとかが、はじめから未来をしばっておいちゃいけないですよ。

未来は解放しておかなければいけないですよ。「そしたら、そ

うなった所で一生懸命やろう」という十六歳の二人の少年の心は

実に美しいと思いますよ。

いつどうなるかわからないという点では、日本の社会は、病気で死にかけている矢沢君の体に似ていますよ。だから、こういう時代に僕らがもってお互いに、本当の意味で愛しあわなければいけないですよ。ところが愛なんてものは、どこかへ行っちゃまってないですよ、SEXしか。こういう時代こそ愛というものが本当に求められているんだと思うな。愛の神秘というものを發揮すべきですよ。矢沢君は、それをこの詩でかいています。

これから人間がどうやって生きていかなければならないかということは、日本人だけの問題ではなくて、人類全体の問題なんですけどね。ここに、テアード・シャルダンのことばがあります。

この地球の上で人間は、どのような生き方をしなければならぬかということ、一九六九年にドゴールが、シベリアのアカデムポロロというところへいった時引用しているのです。『人間が生まれたこの命を、おしみなく与えることのできるものは、それは物を所有することよりも、本当に知ること、生きるということ、ふたつです』

われわれは、生きるということ、もうけてたくさん物を所有するということとすりかえちゃってしまいますけどね、今や、人類

は植民地をとることか、金もうけをするというような所有することよりも、本当にものがわかってくる、自然の美しさがわかってくる、宇宙の大きさがわかってくる、人の心というものも、小鳥の声の美しさもわかってくることの方が大切なんです。

幼児教育とか、これからの教育を考える時、本当に知ることとは何でしょうか。知ることとは、ものをたべることよりも、もっとはりあいのあることでしょ。発見のおどろきがあるわけでしょ。知るといふことと、生きるといふことが、所有すること以上に、人間にとって生きがいでないような時代が来なければ地球は滅びちゃうんです。

そういうことを、幼児の時期に、どういうふうにして教えることができるでしょうか。

現実には、日本の社会は、金があれば何でもできる。こんな店があつて、子どものごきげんとして、子どもからまきあげている園はないですよ、小さい時から、金があれば何でもできる。そして食うことばかり考えていて、水も飲まない。ジュースじゃなきゃ飲まない子がいて、それを鼻にかけているお母さんもいるんだね。そんなのちつともえらくないよ。

テアード・シャルダンのことばですけど、*「生まれた命を、おしみなく与えることのできるものは、これから地球上において所有することよりも、むしろ、本当に知る喜びと、生きている喜びでなければならぬ。」*

そういう、人間の未来に、日本の子どもたちが参加していけるような幼児教育にしてみたいのです。

僕は、幼稚園の園長になって、幼児の問題を考えているうちに、日本の社会のまちがいいろいろわかってきたし、大学やなんかの教育のどこがまちがっているかということも、大学の中にいたらわからないことがわかってきました。

こういう、大きな変革の時代ですから、こういう時代に幼児の問題を考えている人だけが、社会のまちがいと、未来の出口がふさがっている状態が、本当に、わかると思えます。どっかの徒党に属して、はいりこんでいる人には、それが見えないんですよ。

だから僕はつらいんですよ、何か考えたって僕の思うようにはできませんし、ヤギをつれてくれば公害で死んでしまふし、失敗の連続なんで、幼稚園の園長としては、先が見えてきました。私が幼稚園の園長をやっている限り、ぼくは苦しいだけであつて、決して成功はしないだろう。失敗で終わるだろう。しかし、失敗ということは本当に戦った人だけがわかるんだね、戦わない人に失敗は、あるわけではないんですよ。そういうふうに、私は今、考えています。

(一九七〇年七月二十五日 お茶の水女子大学日本幼稚園協会主催 幼児教育講習会での講演より)

中教審の「試案」から「中間報告」へをめぐって



岡田正章

中央教育審議会の「初等・中等教育の改革に関する基本構想」は、四十五年五月発表の「試案」から四十五年十一月の「中間報告」へと固まった。この間に、関係者からの意見聴取が行なわれている。基本的な面では、全く変化していないというべきであるが、若干の点で、異なる表現が用いられている。以下、これらの点について、二、三の考察を試みることにしたい。

一 先導的な試行について

現在の六・三・三・四の学制と異なる学校制度の開発をめざす仕事は、先導的な試行ということばで表現されている。試案で「四・五歳児から小学校のある学年の児童までを同じ教育機関で一貫した教育を行なうことによつて、幼年期の教育効果を高める

こと」とあつたのが、中間報告では「小学校の低学年の児童」と表記が改められている。これは、四・五歳と小学校一・二年生とをあわせた、いわゆる幼年学校の構想をやや具体的にしたものと思われる。そして、そうした学校が、従来の小学校教育のイメージと異なる、新しい幼年期にふさわしいものとなることを打出すことに、心を配つたものと受取ることもできよう。

しかし、その趣旨は、試案と中間報告との間に、少しもその変化が認められない。たとえば、幼年期のいわゆる早熟化に対応する就学の始期の再検討、早期教育による才能開発の可能性の検討に対して、具体的な結論を得ようとするのを、幼年学校試行の根拠としている。この点に対する幼児教育関係者の見解は、「就学前教育においては、しつけ教育、情操教育、音感教育に主眼をおいて幼児の人格形成をはかるべきであろう」「三歳児について

は何ら述べられていないが、現行どおり幼稚園教育の対象であることを明確にすべきである」などに示されるように、この年齢段階の子どもに、何を教育すべきであるかについて、中教審諸氏の意見とかなり大きなへだたりがある。

まして、六・三制と四・四年とが並列的に制度化されることとなり、後者が早期教育による才能開発にとって望ましいものということになれば、幼児の頃から、選別による教育が行なわれることとなり、ことがらはきわめて重大なものとなる。少なくとも初等教育までの教育は、普通教育がもつ基本的性格としての共通教育と基礎教育との役割を、名実ともに行なうべきである。この段階で学校制度の二本だてを考へることは適切な発想とはいえない。むしろ、小学校低学年の教育のあり方そのものの反省的検討を、現在のしくみのなかで真剣に行ない、また、幼稚園・保育所のなかで、三・四・五歳児の教育そのもののあり方を改善する努力と、その努力を支持する行財政的な援助こそもっとも重要なのではあるまいか。

現在のわが国の教育努力の成果を、より一層望ましいものにすることは、国民誰しも願うところである。しかし、そのことが、修業年限の区分に手直しをし、新しい学校制度を作り出すことだけにによるものでないことを強調したい。

もし、六・三制の教育が期待どおりに進んでいないとしても、

それ自体、教員の教育能力・教員一人当たりの受持ち子ども数、世界先進国のいづれと比較しても、いくつかの問題をもって、ことに気づくはずである。幼年期の教育効果を高めることも、この点の改善によって、十中八・九までは成功するのではあるまいか。

さらに、四年制の幼年学校構想に対しては、他の異なる面から疑念をもたざるをえない。昨年十一月二十八日号の日本教育新聞に依頼されて筆をとった一文を掲げて、そのことに一言しておきたい。

「現在の幼児教育制度が万々歳のものであるとは、誰も考えていない。したがって、よい方向への改革は、強く望んでやまない。い。

その場合の基本原理は、すべての幼児に名実ともに均等な教育機会を保障するところにある。このためには、幼稚園と保育所とが二分され、保育所での教育的機能がまだ行財政的に十分保全されていないことこそ、まず先導的な試行によって、問題の解決を図るべきではないかと考へる。

とくに、今回の幼児期の教育機関に対する先導的な試行の案では、ききの基本原理が一層混乱させられるように思われるので、問題を深刻に考へなければならぬ。というのは、四・五歳児と小学校一・二年の六・七歳児とを同一の教育機関で教育する、仮

称幼年学校が構想する教育対象は、どういふ子どもであろうか。

果たして、両親がともに労働に従事し、日中その子どもを監護することのできない家庭の四歳から七歳までの子どもを、教育の対象として予想しているのであろうか。

答えは、恐らく否である。なぜなら、文部省が所管する学校体系では、これら低年齢の子どもに対する教育の場は、半日程度にとどまることが望ましいとされること、ほぼ見当づけられるからである。

もし、午後、家庭での監護に欠ける子どもたちを世話することを考えるとしても、恐らく、現在、文部省・厚生省が学童の鍵っ子対策として実施しているものとなるにちがいない。しかし、この方式が、六・七歳より年齢の小さい四・五歳児に決して望ましい結果をもたらすものでないであろうことは、保育所・幼稚園関係者により憂慮されているところである。そのような憂慮が杞憂であるといふのであれば、そのことを明確に提示できるものを準備することこそ、たいせつな先導的な試行といふべきではないだろうか。

もし、これらのことを不問にして、単に四歳からの半日程度の教育を行なう幼年学校が試行され、それが六・三制と平行的に制度化されることとなれば、教育の機会均等の理念は、完全に否定されることになる。

なぜなら、幼年学校は、両親がともに労働するという社会的地位によって、その子どもには利用されないこととなり、教育基本法第三条の規定に真っ向から違反することになるからである。このような重大な危険を、どのように排除して、幼児期の発達課題を、すべての幼児に差別なく達成するにふさわしい幼児教育制度を生み出すか、万全の策がとられることを望んでやまない」

二 私立幼稚園の位置づけについて

試案から中間報告への変化のなかで、私立幼稚園に対する位置づけに若干の変化が認められる。「幼稚園教育の積極的な普及充実」のために、国が推進すべき施策として列挙されている四つの事項のなかで、試案では第三項に、「公私立の幼稚園の質的な充実と、修学上の経済的負担の軽減を図るため、必要な財政上の措置を講ずること」ということがあった。

これが、中間報告では第二項に位置づけられ、かつ、その文章は、「公・私立の幼稚園が公教育としての役割を適切に分担するよう、地域配置について必要な調整を行なうとともに、教育の質的な充実と、修学上の経済的負担の軽減をはかるため、必要な財政上の措置を講ずること」と改まっている。公私立の幼稚園を適正に配置させ、既存の幼稚園が公私立を通じて、例外なく廢園への道をたどらないようにすることが、わが国の教育資産を尊重す

る道であることは、拙著「日本の保育制度」(フリーベル館発行)の二六四ページで指摘したとおりである。

このことを、中間報告は、試案での段階よりも、より強く提案しているといえる。このことはきわめて適切であり、重要視したい。なぜなら、私立学校を始めることによって、わが国の教育に、より新しいものをつくり出そうとして努力を重ねる人たちに、ある時期が来て、お前に代わって公立学校が行なうことにするから、もう用はないという措置がとられるならば、いかなることが起こるか。私人による教育への挑戦のエネルギーは、最初から起こらなくなることは必至である。わが国が、今日選ぶべき道は、私人による教育への挑戦を奨励することにある。一幼稚園の存廃という事象を、ここまで深くとらえ、公・私人ともどもに、公立幼稚園の適正配置に、公の責任を確立することを、さらに強く望みたい。

このためには、現在、公・私立幼稚園の認可権者が県教育委員会・知事とわかれ、また、保育所の認可権が県知事の民生部局にあって、何ら、有機的な関係のないことが改められねばならない。かつて、文部省から局長の通達で適正配置への配慮が求められたが、実効をあげていない。中教審がわが国の学校制度のあり方の一環として、このことを提案したとするならば、教育行政の組織および運営に関する法律、私立学校法、児童福祉法の法律

の一部改正を同時に行ない、法律レベルでの問題としての確な道を開くなど、叡知を働かせることが必要である。かつ、私立幼稚園への道が、保護者の保育料負担の公私間における格差是正によって公正なものとなることは、あらためていうを要しない。抜本的な改革の推進されることを望んでやまない。

三 幼稚園と保育所との関係について

中教審の試案発表に関連し、「中教審に怒り爆発」という見出し(福祉新聞四十五年九月十五日号)で、反論が取り上げられる一幕があった。それは、中教審が試案のなかで取り上げた、次の部分に対する、全国社会福祉協議会保育協議会、全国私立保育園連盟などの動きである。

「当面の施策として、経過的には『保育に欠ける幼児』は保育所において幼稚園に準ずる教育が受けられるようにし、その他の希望者はすべて幼稚園に就園させる……」

これに対する保育協議会の見解は、昭和四十五年九月五日、全国保育研究協議会での決議という形で示された。そのなかで、

「教育は幼稚園、福祉は保育所という、あやまった原則から出発するならば、保・幼を全く別機能のものとして新しい分布図をえがき、地域児童にこれらを全く別に利用させるといふ不自然な状態を一層拡大し、強化させる危険が予想されます。答申案のこ

の部分は、根本的に修正さるべきであると考えます。

わたくしたちは制度的にも内容的にも、福祉と教育を一体化し、保育所の最低基準を根本的に改善し、保育所の教育機能を幼稚園に準ずるのではなく、全く同一のものでなければならぬと考えます」

という主張が記された。

私立保育園連盟は、同年十月八日中央教育審議会会長に要望書を提出し、さきの全国社会福祉協議会保育協議会とは同様の主張をした。その一部を引用すれば、次のとおりである。

「幼児教育は、その内容においても、福祉と表裏一体に結びついています。あそびの中の学習、生活経験と密着しての教育を原則とするものであることは、現場実践の側からも、関係学者の研究側からも明らかにされています。

それなのに、答申案は児童福祉の現状を分析せず、幼児教育の内容を明らかにせず、主として幼稚園の増設普及を強調しています。これでは、日本の幼児教育の制度と内容はますます混乱を深めます。母親は自分が働くことと、幼児教育を受けさせることとの矛盾を一層切実に悩むようになります。また、幼児たちは幼児教育をうける場や時間帯を、生活経験をうける場や時間帯と分割されることになることは必然の帰結です。

われわれは、答申案のなかで、このような帰結を導く部分につ

いて根本的な改訂を要請します」

そうした意見の反面、公聴会などでの意見には、次のようなものがあつたとされている。

「幼稚園と保育所との性格の相違をまず明確にして、それぞれの機能を十分發揮できるような具体策についてのべる必要があるのではないか」

「保育に欠ける児童に対しては、保護と教育とを一体的に行なう必要があるので、保育所で保育を行なうことが適当である」

各種の意見を参酌しての、中教審の「中間報告」での見解は、次のように書き改められている。

「保育所との関係については、経過的には『保育に欠ける幼児』は保育所において幼稚園に準ずる教育が受けられるようにすることを当面の目標とすべきである。しかしながら、『保育に欠ける幼児』にも、その教育は幼稚園として平等に行なうのが原則であるから、将来は、幼稚園として必要な条件を具備した保育所に対しては、幼稚園としての地位をあわせて付与する方法を検討すべきである」

経過的な取扱いにおいては、試案と中間報告とは全く同一であるが、中間報告では将来論が打出されている。そもそも、中教審は、昭和四十二年、学制改革の検討について文部大臣から諮問を受けたとき以来、約二年間、検討すべき問題を総ざらいした。

その成果が、四十四年六月、「わが国の教育のあゆみと今後の課題」と題して中間報告されている。このなかで、就学前教育の分野に関しては、万事につけ、幼稚園と保育所との関係を調整することの必要性が指摘されていた。

たとえば、「就学前教育における幼稚園と保育所の機能の調整は、その歴史的な発達の経過からみても、かなり困難な問題であるが、現行制度の二元的な行政指導が実態の混乱を助長していることにかんがみ、両制度の合理的な調整について改めて検討する必要がある」と指摘している。

しかし、試案では、そうした調整のあり方について、積極的に何ら意見を明らかにしなかった。中間報告が、将来論としてであり、試案で不問にしていたことに言及したことは、注目すべき一点と考える。ただ、一体具体的には、どのような保育制度が成立するのか、関連するところがきわめて広範囲であり、処理せねばならないことがあまりに多いのではないだろうか。

たとえば、もし、保育に欠ける幼児が保育所兼幼稚園で保育を受けることになるとき、ここに要する経費は誰が負担するのか。現行制度では、学校は設置者負担主義であり、保育所は受益者負担主義である。幼稚園教育を含め受ける保育（そういう考え方には、疑問があるが）に対する経費を、八割国庫負担で進めるのであれば、幼稚園オンリーでの場で幼稚園教育を受けるものも、公

私立を通じて八割国庫負担を表現せねばならない。

そのような繁雑・混乱を除去し、すっきりした乳児・幼児の保育制度を創案することができるのではないだろうか。たまたま、四十五年八月から十月にかけて、欧米の就学前保育制度、なかんずくわが国流の幼・保の関係についての視察単身旅行を試みて、いくつかの所見をもっている今日である。

たとえば、フランスのエコール・マテルネルは、三歳から小学校入学の六歳までの幼児を保育する教育機関である。そこでは、母親が働いている家庭の幼児も母親が働かない家庭の幼児も、同一のエコール・マテルネルの同一のグループで保育を受けている。後者の幼児は、午前十一時半に、母親に連れられて家に帰る。前者の幼児は、その後昼食・午睡、そして遊びをして、五時母親に迎えられて帰宅する。きわめて自然に、一日の保育の流れが進められている。急に、母親が働かねばならなくなっても、幼児は施設が変わることなく、長時間の保育を受けることができる。

アメリカでは、サンフランシスコ郊外のパークレーで幼稚園・保育園（デー・ナーサリー・スクール）をみたが、デー・ナーサリー・スクールは、入所の措置は福祉事務所だが、所轄は教育委員会であることが望ましいという問題をかかえ、流動的である。幼・保の関係は現場を混乱させない仕方では、国民の真に願うあり方を創案させたい。（明星大学・宝仙学園短期大学）

子どもの文化（その一）

— 児童文化にかかわる子どもの役割 —



本田和子

はじめに

「子どもの文化」とは一体、何だろうか。現代の子どもは、どのような文化を持つのか。そして、おとながそれにかかわりを持つ時、おとなのとるべき役割は何か。

児童文化の世界に横たわるこれらさまざまな問題を検討するために、まず、次のような例を手がかりとして考えてみよう。

「子とろ子とろ」という遊びがある。「わらべうたを伴う遊び」のひとつとされている。「遊びがある」というより、むしろ「あった」といった方がよいのかもしれない。最近の子どもたちには、あまり知られていない遊びのようであるから。

子どもたちは、一人の鬼を除いて縦長の列を作り、各々前の人につかまる。鬼はこの列と向き合って立ち、「子とろ子とろ」の

歌声に合わせて、列の最後尾の子どもをつかまえようと追いまわす。一番前の子どもは親になり、両手を広げて後の子どもをかばいながら、鬼の走るのを妨害する。「子とろ子とろ」とはこんな遊びであった。

ところで、この遊びが、最近の子どもたちの中で影が薄れているといっても、遊び方自体が失われてしまったのではない。「子とろ子とろ」という遊びについて問われれば、知らないと答えながらも、全く同じ遊び方で遊んでいる子どもを見かけるのは、そうめずらしいことではないのである。

そして、そんな子どもたちは、その遊びを別の名前で呼んでいる。「蛇」と呼ばれている場合もあるし、「ぐじゃぐじゃ」と名付けられていた例もあった。親の後ろにつかまった縦の列が、かきまわるにつれて「ぐじゃぐじゃと蛇行する」ところからつけられ

た名前でもあろうか。この場合、歌は完全に消えてしまっていた。子どもたちは、「キヤアキヤア」と笑い合い息をはずませながらかけまわっていた。

同じ遊びが、別の展開を見せている例もある。それは「小鳥」という名前を持っていた。おそらくは、「子とり」が名詞化して「子とり」となり、その転化であろう。ただ、おもしろいことにこの場合、新しい動きがつけ加えられている例が少なくない。たとえば、鬼と親が、小鳥の翼のように広げた両手をバタバタさせてかけまわる、「青い鳥小鳥、青い鳥小鳥」と歌いながら走る、などである。これは、「小鳥」という新しい名称から誘い出されてつけたされた部分であろう。

ところで、これらの例から、次のようなことが汲みとれるのではないか。すなわち、子どもが「うたい遊ぶ」とき、それは「歌に合わせて遊ぶ」のではなく、「遊びに合わせてうたう」ということである。先行するのは、子どもが列になって逃げ走るという遊びであり、それに「子とり子とり」という意味づけがなされ、歌が生まれてきた。そして、名前や歌が全く消えてしまっても、列をなして逃げ走るという遊びそのものは残り、その動きをもとにして、新しい意味づけや新しい歌が生み出されているのである。

こうみてくると、子どもはひとつのおかしなことがらに気づかざるを得ない。それは、最近とみに深まってきた「伝承童謡への関心」である。おとなたちが「伝統的なわらべうたの保存」に努力し、これを現代の子どもにも伝えていくという運動は、ことがら自体は有意義であり、必要でもあるのだが、やはり一種の本末転倒の感をまぬがれ得ないのではないか。なぜなら、自らなる遊びに伴なって、自らなる発生をみたそれらの歌を、「伝えるべき教材」として子どもたちに教え、「失ってはならぬ伝統」として子どもたちに覚え込ませるとするのは、ひとつの矛盾と思われるからである。

走り、とびはねて、遊んでいる子どもたちの躍動する心が生み出したリズムミカルなことばの数々、そしてみんなでいっしょに遊ぶために、みんなの動作を揃えるために定まっていた単純な旋律、それらがおそらくは「わらべうた」の起源であろうと思われる。ところで、これらの歌を、子どもの心とことばから生まれた最も「子どもの歌」だからといって、「歌を覚えさせられている」という受け身の状態に子どもを追いやってまで、強制的に伝えていくことの意義があるのだろうか。たとえば、それが動きと共に「うた遊び」の形で行なわれたとしても、それがおとなによって「伝えるべきもの」、子どもにとって「覚え込むべきもの」として扱われている限りは同じである。もちろん、伝統の保存を否定

するのでもなく、伝承的な文化財を軽視するのでもない。それらを大切にしていくことは重要で、意義あることである。しかし、これらの「うた遊び」を発生させたような生活の基盤を子どもから奪っておいて、ただ「歌と動作」だけを子どもに伝え、子どもとおして保存していこうとするおとなの姿に、疑問を抱かされるのである。「歌が出てくるほど楽しく、心のはずむ遊びの生活」を子どもに体験させることこそ、「わらべうた」を生み出させる源であろう。源がないのになんとして流れを絶やさぬことができようか。

「わらべうた」に限らず、童話も玩具も、児童文化財と呼ばれるものはすべて、本来は、子どもが遊んでいる生活の中で、遊びの必要から生まれ出てきたものである。そして、そのつくり手は不特定多数の子どもたちであった。つくり手とまでは言い得ぬ場合も、少なくともその発生の過程で、子どもたちは大きなかわかりを持っていた。

児童文化財が、子どもをはなれて独立し、おとなの生産と管理にかかわるものとなったことは、ある意味では進歩であり近代化に連なる歩みでもある。しかし、子どもの生活の中でどのような状況のもとにそれらが生まれ出たのか、子どもたちはそれらとどのようにかかわっていたのか、という根本的な問いが忘れられる時、児童文化財はおとなの趣味と郷愁の対象と墮してしまうので

はないか。

子どもの文化の中で、子どもがとってきた役割、特に「つくり手」であり「にない手」としての役割を確かめ直すことが、ひとつの課題であると思われる。

◆「物語の伝承」にかかわる子ども

古い時代に、子どもたちの周囲に「童話」は未だ存在しなかった。しかし、数多くの物語を楽しむ機会を、子どもとおとなは共有していた。神話・伝説・民話などの古説話、特に民話を心に語られる娯楽の場があったのである。

このような形で共有されていた古説話が、時代が進むにつれて、次第に子どもたちのものに変わっていった。おとなの娯楽の場が他へ広がり、「物語を聞く」という素朴な楽しみ方から遠ざかっていったのがその原因であろう。物語は保育者の手を経て、子どもの所有物となり、子どもの世界を通じて次の時代へと伝えられていった。この過程で質的な変化が生じるのは当然のことである。これが伝承文芸の「童話化」と名づけられる現象である。ところで、次の例は「童話化」現象にかかわる子どもの役割を鮮明にし、子どもの文化に関する子どもの立場を宣言していて、きわめて興味深く思われる。

「シンデレラ」といえば、ペロの「サンドリヨン」、グリムの

「灰かぶり」などの名前で、世界各地に広く分布している説話で、子」の中の「鉢かつぎ姫」であった。しかし、「鉢かつぎ姫」と「サンドリヨン」あるいは「灰かぶりの馬車やガラスの靴が印象的で、薄幸の少女が夢のような幸せを味わう」と「サンドリヨン」の少女が夢のような幸せを味わうという点で、かなり似ている。これを比較すると、かなりのちがいが見いだされる。つかむ物語語であろうか。これに該当する日本の昔話として、ヨーロッパのグリム研究者たちが従来とり上げているのは「お伽草子」たとえば次のようである。

サンドリヨン（ペロー）

- 母親に死なれた娘が継母と継姉に
いじめられて苦勞する
- 娘はやさしくつつましく忍従してい
る
- いつも灰にまみれて働く
- 娘は自分の苦しみを父親にも打ち明
けない
- 王さまの御殿で舞踏会が開かれる
- 姉たちは各々美しく着飾って出か
ける
- 娘は姉の着つけを手伝う
- 姉たちが出かけてから泣いている
- 名づけ親の仙女の出現でカボチャの
馬車に乗り、ねずみの馬にひかせて
宝石で飾った服を着、ガラスの靴を
はいて出かける
- 舞踏会の場面では、みんなにその美
しさを注目される

灰かぶり（グリム）

- 母親が死ぬ時、娘に心と行ないを美
しく保てと遺言する
- 継母と継姉にいじめられて苦勞する
- 上に同じ
- 亡母の墓にハシバミを植え、魔法の
白い小鳥に慰められる
- 上に同じ
- 上に同じ
- 娘もいっしょに行きたがる
- 継母が灰の中に豆をまいて、全部拾
えたら行ってもよいと意地悪する
- 白い小鳥の助いで、豆を拾い終る。
- 亡母の墓のハシバミの木に頼むと、
美しい着物とししゅうの上靴を貰え
る。それを身につけて出かける

鉢かつぎ姫（お伽草子）

- 母親が死ぬ時、娘の頭に鉢をかぶせ
る
- 継母にいじめられて苦勞する
- 娘は家出して身投げするが死ねない
- 三位中将の家にやとわれ、風呂たき
娘となる

- 王子に求愛される
- 姉たちに果物をすすめるが姉たちは気づかない
- 約束の十二時がくるので急いで帰る
- 翌日も出かける
- 十二時に急いで帰るとガラスの靴をおとす
- 城の使いが靴を持ってくる
- 靴をはくことをためすが姉たちにははいらない
- 娘にビタツと合う
- 仙女が現われ娘を美しくする
- 姉たちがゆるしを乞う
- 娘は王子と結婚し、姉たちも各々幸せになる

- 上に同じ
- 夕方になるので娘は王子から逃げて帰る
- 翌日も出かける
- 木に登って王子の追跡をくらす
- 三日目には階段でチャンに足をもられて、靴をおとししなう
- 上に同じ
- 上の姉は指を切りとってはく
- 歩くと血が流れ魔法の小鳥にはやされるので失格する。次の姉もかかとを切りとってはくが同じ
- 娘にビタツと合う
- 娘の結婚式に姉たちがついてくるが鳩に目をつつかれて盲目になってしまう

- 風呂たきをしている娘を見て、中将の四男が求愛する
- 男の母が不具の娘をきらい意地悪をする
- 上の息子の嫁たちと一堂に会して嫁くらべをすることになる
- 男と娘は家出しようとする、娘の頭から鉢が落ち美しい娘になる。宝物や衣も出てくる
- 嫁くらべの席で、みんなに認められ幸せな結婚をする
- 後に父親とも再会し、万事幸せな結末となる

このように、ペローのものとグリムのは細部を除いて、ストーリーも主人公の性格もほぼ同一である。しかし、「鉢かつぎ」は、ストーリーも異なり、それ以上に主人公の性格が前の二者と著しく異なっているのである。「鉢かつぎ」の姫は、「サンドリヨン」や「灰かぶり」と異なって、きわめて消極的で受け身である。いじめられると家出をし世をはかなんで身投げまでする。風呂たき娘になつてからも絶望して泣く泣く働いているのであり、幸せに

なるのはすべて男性の力と亡母の助けである。「灰かぶり」が、自ら小鳥を呼び出して助けを求め、一人で舞踏会に出ていくのは大きなちがいである。この著しい対照は何を意味するのだろうか。ここに「日本的なもの」の投影をみるのはまだ早い。なぜなら、私どもはいまひとつ、次のような例に目を向けねばならないのである。柳田国男氏ら民俗学関係者の努力によって、日本の各地に伝わる民間口碑の採集が進んできた。その中に、これこそわ

が国の「シンデレラ説話」と断言できるものが、現在では数多く発見できるのである。南部の「糖子米子」、津軽の「米袋粟袋」などはその典型的な例であろう。

「米袋粟袋」と「灰かぶり」のちがいは、前者はいじめられる主人公が姉であること、舞踏会ではなく隣村の祭に行くこと、などにみられる。しかし、母の生まれ変わりと称する白い小鳥が現われて娘を助けるところといい、祭の場で継母と妹が美しく粧った自分に気づくかどうかを確かめるため、果物の皮をそっと投げとみるところまであって、この娘は、日本の「鉢かつぎ」よりもヨーロッパの「シンデレラたち」にはるかに近いのである。

妹と継母の出かけていった隣村の祭に、自分もぜひ行きたいと思う。すると即座に友人を呼び集めて仕事を手伝わせ、小鳥から貰った着物に着かえて一人でサッサと出かけていく。途中歩きながら葵の笛を吹くと、その笛は、「この笛をきくものは、天とぶ鳥は羽をよどめて聞け。地をほう虫は足をよどめて聞け」など大げさに鳴りひびくのである。この大胆な行動性、自分の望むことを実現させようとする積極性、そして主人公を包む明るさと楽天性は、「鉢かつぎ」の姫には見られないものであった。

「お伽草子」とは、文正・鉢かつぎ、など二十三篇の絵入横板本の叢書に与えられた名称であり、作者も成立年代も不明なものが多いとされる。しかし、主として、室町中期から末期へわたる

作品が多いとされ、「婦童幼蒙」の読みものであった。作品の源流は各々に異なつて、伝説や童話などの民間口碑もあれば、寺社の縁起もあり、直接物語小説を踏襲したものもあった。むしろ、これらさまざまな源流が一つの作品の中にも流れ込み、混然としてないまぜられているといった方がよいかもされない。

「鉢かつぎ」の源流はおそらくは、わが国に古くから流布されていた「シンデレラ型説話」であろう。しかし、民間で語りつがれ半ば以上「童話化」していたその物語が、「絵入り草子」として文書化される過程で、読者大衆の興味をよりひくためにさまざまに変容がなされたであろうし、「文書になる」というそのことの重みゆえに、筆をとる人の意識の中で、平安朝以来の物語文学への接近がひそかに企てられたであろうことは想像にかたくない。これに比して、「米袋粟袋」はそのまま民間の口伝であった。

そしてその伝承の主要なない手は、子どもであったのである。主人公の哀れさがことさら強調されず、その悲劇性が重視されていないのも、にない手が子どもであったということに原因するのではないか。子どもの健康な感受性が、主人公も健康な子どもであることを欲したのであり、子どもの向目的行動性が、主人公に幸せを求めて自ら行動させることを好んだのではないか。

そして、結果としては、ヨーロッパの子どもの語り継いだものとほぼ同じ物語が現代まで語り伝えられたのであった。

入園期

幼児の教育、第六十九卷第六号で、「入園期の子どもと保育者の心のつながり」について、堀合文子先生に話していただきました。先生は子どもたちの名前をおぼえておいて、子どもに会った時に子どもの名前をよぶことのたいせつき、朝のむかえ方のたいせつき、先生の居所をはっきりわかるように話すたいせつきなどについて述べていらっしやいます。

入園後まもない子どもたちが、幼稚園でどのような生活をしているかを、記録をとおしてみようことにします。

入園まもないころの保育



堀合文子
平野信子

四月九日 火曜日 晴れ

八時五十分

保育室には、先生と①（女児）がいる。先生は花瓶に花をい

け、①は、先生のそばにいる。

先生「お外へ行く？」

「お友だち、いらっしやらないかしら」

「チューリップがきれいね」と、①に話かける。

①と先生で、「チューリップ」の歌をうたう。

①は兄のことを話している。先生は、それに対して、うなずいたり、「そうなの」といったりして応じている。

先生「外（庭）のどこに行ってもいいわよ」

①は、ゆっくりと靴をはきかえ、他のクラスの子どもが遊んでいるようすを見ている。つま先で、砂をいじったりしている。

先生「先生はここにいるから」（庭と保育室の入口の両方が見えるところにいる）

①は、山のすべり台へ向かう。五、六歩進んでは、先生の方を振り返り見る。

すべり台へゆっくりと登り、上でしばらく庭を眺めている。

すべり台を、ゆっくりと足で滑りを止めながら降りる。滑り終わると、しばらくの間、台の一番下にすわっている。二回目は、一回目より早く登り、いきおいよく滑り降りる。

他の子どもが滑るのを眺める。三回目は、走って登り、いきおいよく滑る。満足そうな顔をしながら、保育室に戻っていく。

先生は登園して来た子どもに「おててを洗って」といっている。

①は室内を見わしている。

先生「困った時は『せんせい』と呼んでね」といっている。

先生は、近くにいた女兒と①の手をつながせて、庭への出口までつれていく。

①は、先に立ってすべり台へ行き、いきおいよく滑る。滑っている前の子どもがジョンと降りると、①は、真似てジョンと降りる。

何回か滑ったあと、砂場に先生がいるのを見て、砂場へ行く。

先生「お砂をしましょうか。(シャベルを持って、砂を掘りなが

ら誘う)」

①と他のひとりが、ジョウロとシャベルを出して砂掘りをはじめる。他の子どもは、①が砂を掘っているのを見ている。

H(男児)が、①の隣で穴を掘り始める。

①は、Hの穴に水を注ぐ。①が何回か水を注ぐのをHは見ている。

水道で①が水を出すと、Hがそれを水くみで受ける。Hが水をこぼすと、二人は顔を見合わせてニコツとする。

しばらくして、Hは自分の靴が汚れたのに気づき保育室にいる先生に見せにいく。

先生「それは、お外の靴だから汚れてもかまわないのよ」

Hはニコリと笑って砂場へ戻っていく。

Iは「お帰り」近くになるまで泣いている。

お帰り

先生は全員の名前を呼ぶ。

「Sちゃんがいらっして、Aちゃん、Bちゃんがいらっして、……」

四月十日 水曜日 晴れ

八時五十分

Mが母につれられて登園。

保育室の入口まで来ると、母のうしろに隠れてしまう。

先生「見つけたあ、見いつけた。(ニコニコと笑いながら、入口まで走っていく)」

「きのう、よく遊んだわねえ。(先生は母のうしろにまわりMと顔を合わせて手をつなぎ保育室にはいる)」

次に来た子どもとも先生は手をつなぎ、水道へつれていく。

Mはうがいをするのに、顔に水をかけてしまっは、それをおもしろがり、足をビョンビョンとはね、喜ぶ。

先生はそれを見ながら机をふいたりする。Mが急に泣き始めると、先生は「どうしたの」といいながら、すぐに抱きあげてあやす。

庭で、木の自動車がひとつしか空いていないのに二人の子どもが乗りたがる。

先生「仲よく乗れないかなあ。(一人一人抱き上げて二人を乗せろ)」

「二人で並んでお花畑まで、しゅっぱあつ」(花壇を一周し、川の組まで戻ってくると、二人ともニコニコしている)

登園した子どもが入口に来ると、先生は何をしても「おは

ようございます」といいながら、笑って必ず入口まで迎えに行く。

九時

Iは、登園してから、ずっと、机に向かい泣いている。時々泣きやみ、他の子どもが遊んでいるのを眺め、また思い出したように泣いている。

先生と他の子どもは、汽車を作ったり、レゴで遊んでいる。

先生「汽車ポッポを作ってもいいのよ」

「汽車がIちゃんのところへ行きます」

Iは先生が自分のまわりをまわるのを黙って見ている。

Eがロケットをレゴで作り、先生に見せにくる。先生はそれを受けとる。

先生「Eちゃんのロケット行っちゃった」(部屋中を、そのロケ

ットを高く掲げて走りまわる)

Iは、先生の行動を目で追う。足をもじもじさせ、先生が外のようすを見に庭へ出るとあちこち見まわす。

先生が外から戻ってくる。

先生「Iちゃんも積み木作らない？」

「あら、象さんにごはんあげてるの」(ままご)をしている子に対して)

「Eちゃんの(ロケット)先生のいないうちに随分大きくな
ったわねえ」

「みんな、おしっこに行きたい時行ってね」

Iは、おしっこのため、先生のところへ行く。

先生「おしっこに行ってくださいね」(Iの手をとりながら)

先生がトイレに行ったあと、保育室では、「先生、おしっこ」

とひとりごとのようにいいながら、それぞれの遊びをしている。

先生「ごめんください。たがいま」(トイレから戻り、戸口で部

屋を見まわしながら)

「Iちゃんもやりましょう」(近くにあったレゴに誘う)

Iは、前にすわっていた椅子に戻る。

先生は、ままごとをしている所へ、客として入る。しばらくすると、Iは先生のところへ来る。

先生「お茶をどうぞ」

「Iちゃんもどうぞ。ここへどうぞ」(先生がかけていた椅

子に、Iをかけさせる)

Iは、他の子どもを見ながら、出されたお茶をスプーンで飲

む。

先生「違うごちそうを出しましょう。ちょっとお待ち下さい」

「バイナップルをどうぞ」

I(「口に入れ)カリ、カリ、カリ……ああ、おいしかった」

先生は、ままごとから抜ける。Iは、電話のところへ行き、受話器を耳にあてる。先生が、ままごとに戻ってくると、Iは元の席に戻り、バイナップルを食べる。

先生「新しいごちそう出しますね」

「はい、これあなたのです」(Iに)

HがIにトーストとコップを渡すと、受けとる。

I「ちょっと、お茶を早くくださいな」「早く入れて」

Hについてもらい、飲むふりをする。

I「お茶ちょっと誰かがこぼしましたよ」

席を立ち、コンロへ行く。

I「今度はいちごを持って行こう」(コップにバナナと何かを入れ、机の上に並べる)

Hと向かい合い、トーストを食べるまねをする。かごに果物を拾う。

棚の上のやかんなどを整頓し、なべ、かまをコンロにかける。

他の子どもは机のまわりにすわり、絵をかき始めるが、Iは一人でままごとのところにいる。

「お茶」といってはコップにつぐ。時々、所在なげに、ふらつと立ち上がったたりする。なべに果物を入れ、また皿にも盛る。

先生の方を見ながらアイロンをかける。

I 「先生、アイロン、かけましたよお」

先生「Iちゃん、いっしょうけんめいアイロンかけて、きれいに
なること」(遠くから声をかける)

Iは絵をかいている方に行きたそうに靴をはくが、またコンロ
の方へ戻る。先生の方を見て、またアイロンをかけ始める。

先生「(Iの近くにきて)きれいになったわね。さっきからアイ
ロンかけて、あらきれいになっちゃったわねえ」

しばらくして靴をはくが、また戻る。

先生が、ままごとのパンを持ってくる。

Iは、パンを机の上に並べる。

先生「せっかくできたから、みんなで食べましょうか」という
が、他の子どもの用事で離れる。

Iは、ポットをさわったりする。靴をはくが、またままごとに

戻る。畳の上に落ちていたものを片づける。

I (先生に) ぼく、クレヨン持っている」

先生「そう、いいわねえ」

「きょう、Iちゃんえらくて、先生びっくりしちゃった」

Iは、ままごとの窓からのぞいたり、「アー、アー」と大声を

出す。

ポット、果物などを、あちこちと動かし、一人で遊んでいる。

子どもが二人、ままごとコーナーに来るが、相変わらず一人で遊
んでいる。

九時四十五分

一人の子どもが絵を描き始める。

Hも描き「先生、怪物」といって見せる。

K「ぼくもかきたいなあ」(先生のところへ行く)

他の子どももサーッと集まり、十人の子どもが絵を描く。その
中のEが、あちこち見まわし始め、あきたようすを示す。

先生「やめていいのよ」と声をかける。

先生は、子どもの活動の邪魔にならないように、必要以外の物
を片付けていく。

絵を描いている子どもを見ながら、

先生「あら、きれいに、かけたわねえ」

「みんな、おりこうさんで、エーン、エーンという赤ちゃん

みたいな人も、いなかったわね。先生、びっくりしちゃった」

Rがクレヨンで描いた絵を見せにくる。

R「もういいの、もういいの」

先生「もういいの、もういいのねえ」

お帰り

先生「お帽子持ってきて下さい。Iちゃん、わかるかしら？」

I「わかる」(大きな元気な声で)帽子を取りに行つて、かぶつて戻ってきて、椅子にすわる。

先生「Oちゃん、どうしたんでしょう」

I「もう、直っちゃった」

先生「そう、もう直っちゃった」といいながら、廊下の方へ探しに行く。

他の子ども「堀合せんせーい」

I「むこうへ行っちゃったよ」といいながら席を立つ。

廊下へ探しに行く。「おい」と大声を出しながら、手を振り

まわして、玄関の方へ走つて行く。走つて部屋に戻り、席につくが、積み木をしているのを椅子に立ち上がつて見ている。

また先生を探しに廊下へ走つて行く。また戻り、椅子にかけ、そのあと、部屋をブラブラと歩く。

先生が戻ってくるのと走つて行く。先生のあとについて歩く。

他の子どもは玄関の方へ走つて行く。

先生「みんな、戻ってくるかしら」

I「ぼく、呼んでくる」玄関の方へ走つて行く。

帰りの時、先生は紙芝居をする予定がなかったが、子どもたち

が「紙芝居!」「赤ずきん!」等々、口々にいうため、することになる。

先生「大急ぎで行つてくるから待っていてね。赤ずきんさん持つてくるわね」「数を数えて待っていてね」

実習生といっしょに、声を合わせて「ひとつ、ふた一つ……:とおい」と数え何回も、くり返す。

立ち上がつて、指を折りながら数えている子どももいる。

先生「赤ずきんさん、いなかったわ」と、違う紙芝居をする。

帰りぎわ、先生に触りに何人も出て行き、先生にだいてもらい、急いで席に戻る。

堀合先生との話し合い

(絵を初めて描いたことについて)

十日に、絵を描くことができてきたが、予想外のことだった。家にいる時に描いていたのだと思う。

(Iの行動について)

緊張していた子どもが、ニコッと笑うと教師自身もホッとする。

(子どもがいったことを、すべて受け入れることについて)

先生と子どもとの間に、早く信頼関係ができればと思つてい

ユートピア

現場の夢とためいき

守 永 英 子

そして画面になるところを切りぬくというので、はきみをナイフのように使いながら押したり引いたりして切るのを手伝ったが、おとなの手にもかなりのかさである。そこへN子やM男が「何しての」「手伝ってあげる」と寄ってきて、いっしょに切りはじめる。次々に参加者が増して、箱のまわりはいっぱい。箱を切るのを手伝う人や、教師の助言で画面になる絵を書きはじめる人。そのうち全員がテレビ作りに夢中になって参加した。

いつも「わたしがやるからいいわ」と他を退けてトラブルを起こしがちなN子も、箱がかたくなかなか切れないので、素直に手伝いを受け入れたし、手に血が

三歳児のある冬の一日……
いつも一人で絵本をみたり、空箱で自動車を作ったりしているK男が「テレビを作る」というので、彼のイメージに合う箱をいっしょに探してあげる。彼が選んだのはかなり大きなダンボールの箱。

にじんだ時も「先生、血がでた！」と驚きの表情を示しただけで、作ることに気をとられていた。画面になる絵は二、三枚続きの筋のあるもの、一枚だけのもの、「電車がぶつかった」というニュース性のあるもの。そのうち空箱から切り

とって画用紙にはりつけ、「コマーション」をつくるものもある。帰りぎわに、「みんなで作ったテレビ」をみせてあげた時の、かがやきにあふれた顔……。

短い半日の保育であったが、子どもたちの心にいきいきとしたかままりがあり、充実感があふれてくるのが感じられた。たまたま観察にきていた一学生が「三歳児がこんなに協力できるとは思いませんでした」と感動していたが、もちろんいつも三歳児がこんなに協力できるものではないし、教師がそれを望むことは危険ですらあると思う。年齢が小さければ、個々の活動を大切にしていあげることの方が、基本だと思われるからである。

ここで私が一番いいたいのは、その時の子ども達の欲求をピタリと捉え、それと呼吸の合った助言、助力ができて、子どもの心がいきいきと動き、活動が発展してくるのを感じたとき、本当に保育の喜びがあるということなのである。それ

が肌で感じられ、自然と心が喜びにはずんでくるのである。

保育者として、いつもこういう保育がしたいと思う。しかし正直に言って、残念ながら心はずむような保育ができることは少ない。なぜなら、そのためには保育者が心身さわやかで、全神絳が、子どもの動きの中から小さなサインも見逃さずことのないほどはっきり目ざめていて、瞬間瞬間に、保育者の必要な動きをビタリと判断し、はつらつと動ける……そんな条件が保育者の側にととのつていなければできないと思えるからである。

わが夢多き園長先生はこうおっしゃる。……先生が、疲れたいやな顔で子どもの前にでてはいけませんよね……。本当に、心から私もそう思う。

確かに、疲れると子どもの動きを捉える視野が狭くなるのを感じるし、子どもの動きから保育に必要なサインを捉えるアンテナの機能がガタリとおちる。疲労

のひどいときは、子どもの動きさえ、負担に感じることがある。そのようなとき、保育者を支える唯一のものは、子どもが保育者に寄せている信頼感であり、期待である。これにこたえるために、保育者は努力を続ける。

通常八時半出勤、早く登園する子どもの世話をしながら、保育室をととのえる。子どもが一人でも登園してきた時から保育ははじまる。昼食時もむろん保育である。食後の休憩さえほとんどないに等しい。そして一時半に子どもを帰すと、すぐ保育のあと始末や掃除にかかると、つまり掃除がすむ二時半〜三時まで。は全くの休みなしである。出勤時間から、なんと六時間〜六時間半は、ほとんど動きづめということになる。そのあとは、事務的な整理や打合せや準備など……。勤務時間内には教材研究のための読書の時間もほとんどとれない。回復しきれない疲労が日に日にたまっていく。

ヨーロッパの幼稚園では子どもたちが

大変静かだと聞く。先日の新聞によれば西欧では幼稚園不足にもかかわらず十五人程度の定員を守るところが多いということである。日本の設置基準は四十人。個々の子どもを大切にしようとする保育者には、大変な負担である。

忙しいのも、疲れているのも、なにも保育者だけに限ったことではないといわれるかもしれない。たしかに世の中全体が、慌しい。

子どもは親のイメージに合わせて、ピアノに、バレエに、体操クラブに、そして年長児になれば入試準備に……とかりたてられる。

教師は、コグーイを、ピアジェを、才能教育を……と、なんでも知らなければと焦る。本当にこれでいいのだろうか。自分も大きな慌しい流れの中に巻き込まれながら、ためいきをつく。忙しきの中に自分を見失い、ふと気がついたときには、ポロぞうきんのようになってしまうのではないかしら……と。

日本人の自然観

はじめに

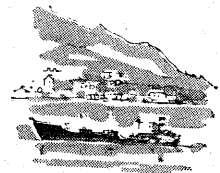
洛北に「円通寺」という寺がある。比叡山を借景としてとり入れた庭が有名である。京都の寺院には、庭の景色のつづきをふすま絵に描いているところもある。障子やふすまを開くことによって、人間が居住する空間である屋内と、戸外の自然がつながってしまう。さらに、そのつながった自然は、円通寺のように、遠く望む山へつらなっていく。人間の生活と自然との間に対立がなく、互いに融合しあっている世界、それが古き日本人の生活であり、日本人の自然観にも深く影響している。

現代の平均的な都会生活はいかかであろうか。自然と人間は、2DKのコンクリートの壁とアルミサッシでへだてられている。

太田次郎

自然と融合しようにも、自然そのものが失われ、そこなわれている。このような自然と隔絶された世界に住む人間、特にこんな世界で育てられた子どもたちは、どんな自然観をもつようになるのだろうか。それは、前にあげた日本人の伝統的な自然観とどんな違いがあるのだろうか。

この問題は、短時間に解答を出せるものではない。しかし、それを考える上の基礎として、日本人の自然観をもう一度見直し、西欧諸国のものと比べてみることは必要であろう。筆者は、この問題を専門的に研究しているわけではないので、折にふれて考えたことや、啓発された著作（特に寺田寅彦・和辻哲郎・筑波常治の諸氏のもの）を参考にして、随想的に述べてみたい。



山紫水明と地震・雷

山紫水明というやや古めかしい、少し懐かしい語は、かつての美しい日本の自然をあらわしている。日本は、日光が強すぎず、弱すぎず、年間を通じて適度の降雨量があり、地球上のどこよりも、植物の種類が豊かで、よく繁茂する地域である。緑色の自然に囲まれている。山紫とよぶのは、山の植物の緑が、水蒸気が多いことで、かすんで紫色にみえるためである。植物や農作物が多彩なことは、温和な気候と豊かな水に支えられた日本の特徴のひとつである。より正確には、あったという方が今の日本にとって適切であるかもしれないが……。

「地震・雷・火事・おやじ」とは、かつてこわいものの象徴であった。火事、おやじはしばらくおいて、地震と雷であらわせるいわば天変地異は、温和な周期的変化の中において、不規則に急激にあらわれる変化である。つまり、日本の自然は、寅彦の表現をかりると、次のようにまとめることができる。

第一は、気候の多様性で、大陸的な要素と海洋的な要素が交錯し、温和な周期的な変化の中に、不規則で急激な変化が起こる。

第二は、地形的、地理的要素の複雑性で、火山および地震帯が交錯している。第三は、動植物および農作物が多様なことである。

このような日本の自然の特徴が、日本人の自然観や、さらに広く日本人の思想の成立に大きく影響したことは疑いないであろう。

小春日和

日本語には、他国語に翻訳が不可能な優雅ともいえる表現がいろいろある。「小春日和」「五月雨」「春雨」、どれをとってみても、自然の姿が背景として浮かぶ語であり、「春雨」や「五月雨」は、決して単に「春の雨」や「五月に降る雨」という意味ではない。つまり、日本人は自然の刹那的印象をとらえて、それを表現しようとする傾向が強い。このことは、自然に接した場合、そのしぐみを調べようとするより、自然の移りかわりをじっくり見きわめようとするこのあらわれである。したがって、日本人は伝統的に自然の観察者であって、自然の研究者ではなかった。このことは、自然観だけでなく、芸術など広い分野にも影響を与えている。

このように、自然を観察できるのは、さきに述べた温和な気候や、やすらぎをおぼえる緑に恵まれたためであろう。住居という、人間の生活の場でさえ、自然と隔絶する必要がなかったわが国は、中近東のきびしい自然や、比較的寒冷で、植物にもとぼし

い西欧の大部分の国々とは大きな違いがある。

お茶づけの味

日本人は、食生活で淡白な味を好む。さらさらとお茶づけをかきこむ爽快感は、栄養学者がいかにも警告しても、なかなか捨て切れないであろう。

このような食生活になったのは、稲作を中心とする農耕のためである。イネは、連作がきき、土地の利用法として効率がよく、しかも豊富な水を必要とする。まさに、日本の風土にうってつけの作物である。主食としての米、副食としての野菜、海や川でとれる魚介類、これが日本の食生活である。

ところで、稲作は日本人の社会の成立に大きい影響を与えた。連作が可能なこと、豊富な水を使わねばならぬことは、一定の土地にへばりついた、他の土地との交流の少ない生活をつくりあげた。隣近所どうしは、土地を中心にした連帯感をもつが、(ときにはそれが村八分のような形にもなるが)ある地域に限られた、排他的で、保守的、独善的な社会をつくりあげ、古い生活態度を固執する傾向を生じる。

また、農耕は、自然の制約を強く受ける。台風、洪水、かんばつ、病虫害など多くの脅威にさらされる。これは、やがて無常感

を生じ、人力をこえた神々の支配についての思想ができる。少なくとも、自然のしくみを理論的に考えようとする西欧的な科学的思想を生じにくいことは明らかであろう。

ただし、断わっておくが、お茶づけの味に象徴される日本の稲作文化が悪いとか、科学的思考を生じにくいから、西欧の文化に比べて劣っているとか、未発達であるとか述べているのではない。ただ、農耕や稲作文化により生じる傾向を指摘しただけであり、人間の生活様式は、それぞれその時代、その環境や風土により適した形で行なわれていたと考えるべきである。

以心伝心

日本人は、知識の伝達を以心伝心であらわされるやり方にたよる。西欧のように、言語を知識伝達的手段とする傾向が少ない。

稲作文化の閉鎖社会では、人間はみな気心がわかった、意思の通じ合う仲間である。一杯飲んで、腹を打ちあけて話し合えば、わからないことはないはずである。したがって、ひとつの問題について対立する意見を述べあう議論は排斥される。理屈っぽいやつは嫌われる。議論する(極端な場合には、意見を述べることできえ)のは、けんかするのとあまりかわらない。人間の大きさなどという日本人にしかわからない尺度を、「清濁あわせ吞む」能力

ではかられたりする。

これでは、論理的思考形式が育つわけではないし、科学的思想が定着するはずがない。論理とは、知識人が特定の場所で用いるものであって、日常生活の上では大したことはない。したがって、論理を尊ぶ大学の先生方は、世間がわからない人々なのである。

明治以後、西欧的思考形式がはいつても、しょせんは、木に竹をついだ状態であるし、戦後の民主主義が定着しないのは、あたりまえのようである。

血の色のスープ

ある日本人の料理研究家が西欧に旅行し、レストランで食事したとき、トマトのスープが出た。たまたまレストランの照明がかわつて、スープの色が血の色に近くなつたとき、その人はまったく食欲を失つたのに、ヨーロッパ人は喜々としてさじを口に運んでいたそうである。ふつうの日本人がなかなか口にしない、血のしたたるビフテキを欧米人が好むのも、これと近い例である。

その原因は、ヨーロッパ人が牧畜民族の子孫であり、日本人が農耕民族の子孫であることであろう。牧畜民族は、農耕民族と違って、土地に定着せず、きびしい自然条件と戦わねばならない。

したがって、彼らにとって、自然とは人間の生活と融合できるほど温和なものではなく、人間の生活に立ちはだかる、人間と対立するものであった。それが、自然のしくみを知るための努力を生き、自然科学を成立させる動機となつたのであろう。

また、一方において牧畜民族は、人間と他の動物との間に明白な線を画した。家畜とは人間の衣食を支えるための動物である。彼らにとって、人間が主であつて、他の動物は従であり、両者が混然となることは考えられない。進化論が西欧に大きな反響を呼んだのも、人間と他の動物とのつながりを考えたところに問題があつたのであろう。この点、農耕民族はようすが異なる。四つ足の動物を殺して、その肉を食べ、皮を着ることは、農耕民にとっては、残酷で、野蛮なことである。動物愛護の精神がイギリスで唱えられたのは、彼らの日本人からみれば野蛮にみえるキツネ狩りなどに対する一種の贖罪行為と考えられないこともない。

文明開化

このような伝統的にあまりに異質な二つの文化が、ふれ合い、独得の結合をしたのが、日本であろう。長い鎖国の後で、明治維新以後急速に西欧文化が輸入された。まず、はいつてきたのは、抽象的な科学ではなく具体的な工業産物であつた。鉄道・船舶・

電信・電話機、明治の日本人の目にふれたのは、まさに文明開化という語であらわされるものであった。ともかく遅れをとりもどし、追いつくためには、理論よりも技術の方が必要であった。科学とは、その底を流れる合理的思考と切り離されて、文明開化を導く、摩訶不思議なものであった。

このような風潮は、明治百年をすぎた現在でも根強く残っている。最近のコンピューター・ブームなどもその一例であろう。しかし、ともかく、日本において、異質の二つの文化が接し合ったことだけは、確かである。そして、その間をつなぐものとして、おびただしい漢語がつくられ、最近では西欧語を語源とする新造語もつくられている。われわれは、そのような新造語で論理を考へながら、また伝統的な自然観や社会観も温存している、世界的にみれば不思議な国民であろう。

自然にふれる

今まで雑然と述べたことが、「幼児の教育」とどんな関係をもつか疑問に思う人もあるであろう。しかし、領域「自然」で扱われている自然観察を考える場合に、深い関連がある。幼児期の教育目標として、よく「豊かな人間性を育てる」という語が使われる。豊かな人間性や、好ましい人柄とは一体何なのであろうか。

われわれが伝統的にもってきた、自然観や社会観を育てることであろうか。それとも、西欧的合理主義を信じる人間を育てることであろうか。自然の観察にしても、伝統的な観察者の立場を守るべきか、それとも研究者を育てるべきであらうか。「それは、その人の進路によって定めればよい」というのもひとつの解答であろう。しかし、実際には、自然観察を科学教育の一環として考える人々がふえ、そのような教育が広まりつつあるのではなからうか。そして、論理や思考よりも知識を安易につめ込むことが行なわれているのであろう。

山紫水明の世界は、急速な工業化の前にくずれようとして、日本人の生活もまた急速に西欧化している。だからといって、伝統的な自然観はそう短時日にかわるものとは思われない。これ以上、自然の破壊を無差別に行なうべきでないことはいうまでもなく、また人間の力の無力さと、人間の営みへの過信とを切実に考へねばならぬ時代となった。今、われわれは、多くの選択を迫られ、そのいずれもが簡単に二者択一できないものである。

せめて、自然にふれることの少なくなった子どもたちに、自然と接触する機会を多くしようというぐらいしか、対策の立てようのないのが現状といえるかもしれない。

(お茶の水女子大学)

手先の動きと子どもの感情 ⑩

清水エミ子

◎ 早生まれ児と、おそ生まれ児の指先の反応の比較

四月生まれ児と、三月生まれ児の指先の反応

「ゆみこちゃん早くしなさいよ、いつでもいつでもおそくてさ、どうしてなの、ずるいよ」

「かっちゃんてさ、いうのははやいけどさ、やるときにはいつでものんびりしてるのね。ふとってるからじゃないのに、どうしておそいのか、手をみせてみな、そうか、ちょっとちっちゃいのかな」

こんなことがたびたび自由なあそびの中で聞かれたのだ。

こんなことを聞いてから、子どもたちの行動・特に指先の動きをみつめてみると、友だちに、のろい・はやくして・ときいそくされている子どもたちは、生まれ月のおそい、早生まれの子どもたちに多いように思われてきた。

はじめは、偶然・ではないか、とも考えたり、経験の差が手先の反応に表われているのではないだろうかとも考えた。しかし、今まで指先をみつめてきて何か思いあたるような感がするので、いくつかの実験場面から、生まれ月における手先の反応を比較してみることにしてみた。

実験場面の設定

・ 特別の活動の場では、自然の状態が表われにくいので、自然の状態と比較できる活動場面をえらぶことにした。

日常自然の状態で、くりかえし活動しているような活動と場を、用いることにした。

ナワトビあそびがさかんに行なわれている時期であったため、

1 ナワトビを取り上げる時の手先の反応

自由な時に、自由に絵を描く時（自由絵）、

2 自由画帳に絵を描こうとする時のクレヨンをえらび取る手

先の反応

紙をいじったり折ったりして開放されている時、

3 折紙を折っている時（折りはじめ）の指先の反応

これらの活動は、子どもたちがくりかえし自由な活動の中で、みずからの気持でえらび取って行なう行動と活動であるので、自然のままの状態が表われるであろうと考えて設定した。

実験①

◎ ナワトビを取り上げる時の指先の反応比較

① 女児 三月生まれーゆみこ、四月生まれーたかよ

男児 三月生まれーかつとし、四月生まれーよしあき

◎ 保育室の床に、ナワトビのナワ（ひとりどび用）を、とびよいようにならべておいて、「よーいどん、でナワトビをしてみせてね」と呼びかけて、ナワトビをさせた。

◎ ナワトビのえをつかむしゅん間の手先の反応を観察した。

◎ 考察

女児

写真①ー④

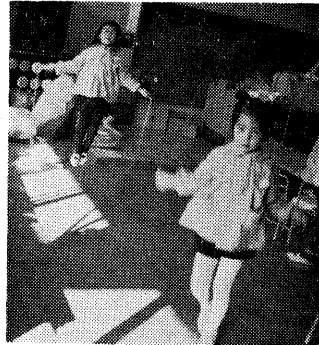
四月生まれのたかよは、何のためらいもなくサッとナワトビの



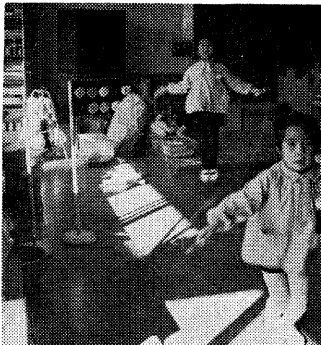
写真①



写真②



写真③



写真④

にぎりわしづかみにした。(両手を一度に)

三月生まれのゆみこは、指先に力が入り、指をびんどのばし、腰まで高くしてナワトビのにぎりを指先でさわってみて(ふれてみて)からゆっくりとにぎっていった。

やや右手の方が早く、左手の方がおそくなっていた。(右ききである)とぶとぎのスピードも、たかよ(四月生まれ)の方が早かった。

男児 写真⑤―⑦

四月生まれのよしあきは、ひざをちょこっとまげるようにしてナワトビのにぎりをわしづかみにし、とぶ前にもう一度小指、薬指、中指を、開いたりにぎったりしてにぎりなおし、持ちやすい

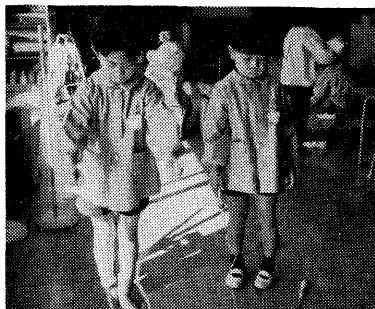


写真 ⑤



写真 ⑥



写真 ⑦

ように持ちなおし、すぐにとびはじめた。とぶときは、左手がややおくれるような状態でとび、ナワがつつかかると、ナワのにぎりを持ちなおしてとびなおしていた。

三月生まれのかつとしては「ナワトビとんでみせてよ」と声をかけると、「うん」と氣がるに答え、「ぼくうまいよ、とべるものパッテンとびもやれるんだ」といばつたことをいっていたが、ナワを持つ時になると、片手ずつナワトビのにぎりに近づけ、指に力をいれてぎごちなくつかみとっている。右手が先につかみ、左手はたよりなく空にういているのだ。右手指も、にぎる前にビクビクッと動かしてからやっとなぎる、という状態で、口でいっていることと、指先の行動の、あまりにも差があるのにびっくりしたのだ。

口や顔では、自信がありそうで、何もこわがっていないようにみせかけているが、手先は全くきんちょうし、硬直してしまっている。こしまでかたくなっているようにも感じたのだ。

ナワトビをとぶときも、一回一回ナワにひっかかってしまい、手と体とのバランスを完全にくずしてしまっていた。

「あら、へんだな、とべるんだけどつかかっちゃうな、へやだどだめなんだよ先生、そとへいってやってくるね」

三月生まれのかつとしては、きんちょうすると手先が思うようにな動かなくなってしまう。ナワトビのにぎりをにぎるということひとつでも、こんなにぎごちなくなってしまうのだ。四月生まれ、一年間の生活経験は、こんなにも指先に自信として表われてくるのだなと気づき、おどろかされたのだ。

ナワトビという、体全体の運動をともなう活動の中でも、体全体から受けとる感じと、指先だけの表われとちがってきていることがわかった。(体全体より部分、そして特に指先の部分)

無意識に、ナワのにぎりをにぎる、ひろう、持ちなおす、こんなかんたんにくりかえされる活動の中の指先にこそ、真の心の表われがかくれているのだな、と感じたのだ。

心の信号が、すなおにそのままつたわっていくのが指先なのではないか、とナワトビあそびのナワを持ってどぶという動作のなかで感じたのだ。

実験②

◎自由画帳にクレヨンで絵を描こうとする時の指先の反応比較
①呼びかけ、ゆみこ(三月生まれ)が自由絵を描き出した時、四月生まれのたかよをさがして、「ゆみこちゃんとすきな絵描いてみない? 先生に描いたのみせてよ」と四月生まれのたかよに

声をかけ、となりで描くようにうながした。

三月生まれの子は保育者の呼びかけですなおな反応がなくなるといけないと考え、四月生まれをさそうようにした。(四月生まれでも保育者にいわれたことをよろんでやる子、あまりきんちょうしないで活動できる子をえらんだ)

◎クレヨンをえらんで取る時の指先、つかみとりかたの反応を比較した。

◎考察

① 女兒 写真⑧—⑩

四月生まれのたかよ(写真向かって右)は、すぐに「うん、かくね」とクレヨンを取り描きはじめてが、三月生まれのゆみこは、自分で絵を描こうという意思で自由絵に向かっていたにもかかわらず、四月生まれのたかよの行動より手間どってクレヨンをえらんでいる。

三月生まれは、クレヨンに手がいく前に手を組んで考えこんでしまっている。あとからその場に参加しような状態であった。手を体の前で組んで指先をしじゅうピクピクと動かし、えらぶことにまよっている表われをみせていた。クレヨンに指がいつても⑩のように指先でクレヨンの上をなせていて、すっと目的の色をえらべない。三月生まれがクレヨンの上に指をのせている間に、四月生まれはさっさと動物のような物を描き出していた。

写真 ⑧



写真 ⑩

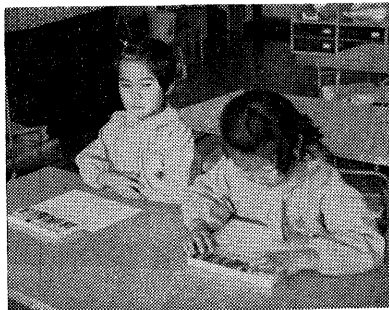


写真 ⑨

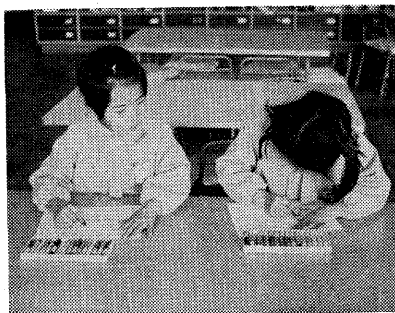


写真 ⑪



描いている途中でも、三月生まれは、四月生まれを気にするよう描くことをやめてながめていることが多かった。写真⑨クレヨンの色のとりかえも、四月生まれはちょっとクレヨンケースをみて、のぞみの色を取って描くが、三月生まれは、いちいち指先でなげたり、あれこれとまよって次の色をえらんでいた。これは、ゆみこひとりの特徴、くせではないかと思われたので、他の三月生まれも実験してみた。

やはり、一本一本のえらびに時間がかかるしクレヨンの上に持って行く指先はこうちよくしたり、おちつきなく動きどおしであったり、と反応にはっきりと差があった。そこでゆみこ独自の反応でなく、生まれ月のおそい子どもたちの経験の未熟からくる指先の表われであると思われるのだ。

男児 写真⑫―⑮

三月生まれのかつとしは(写真向かって右)

「ぼく新幹線描こうかな」といいながら、ひとりでクレヨンを取り出して来て描き出そうとしたので、「かっちゃん、この机でかいてもいいわよ、あかるいから。同じグループのよしたかちゃんよんでいい?」と聞いてみた。「いいよ、まつもとくんおいでよ、こいよ」と自分できそったので、私はやれやれとみていた。ふたりはクレヨンのフタを取るのと同様だった。

がクレヨンをえらび取る時は女兒と同じように三月生まれのか

写真 ⑫

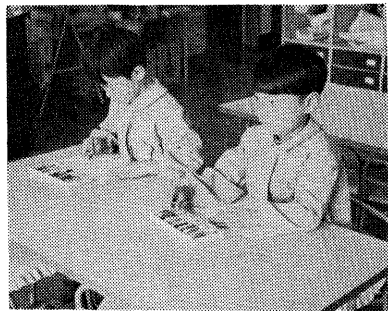


写真 ⑬

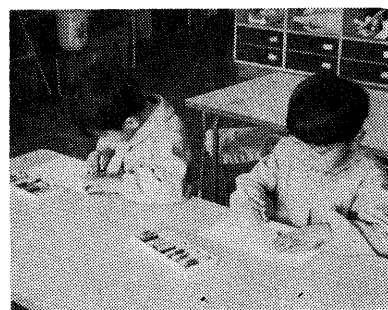
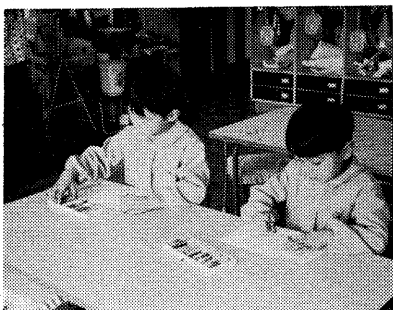


写真 ⑭



写真 ⑮



つとしては、まごまごというより、指先に力が入り、取ろうとするクレヨンの上で、指先がその色を取ってもいいのだという確認の合図のような動き、コチョコチョというような動き方をしてから、クレヨンを取り描き出していった。新幹線ではなく、いぬのようなものをかき出していった。

四月生まれは、クレヨンの位置を自分できめてあるのかと思われるような早さでクレヨンを取るし、色の確認のようなことはしていない。

四月生まれは、まずつかんですぐ描く。描こうとして紙にクレヨンがさわった時、はじめて色のちがいに気づくというような描き方なのだ。女児の四月生まれのたかよもそうだったが、男児のよしたかもそうで、「あっ、赤だと思ったら…いいや、ここくろにしちゃえばいいや」というようなちようしで、指先もためらわなくなっているのだ。

三月生まれのかつとしては、描いている途中でも指先がぎこちなくなり、クレヨンをにぎり持ちにしてしまい、どうやってクレヨンを紙につけて描こうかとまどい出していた。

こんな時でも、顔の表われはしゅん間のきんちようで消えてしまい、あとは「どうしようかな、ここつなごうかな」と何か考えているようなことばがとび出してきたくらいで、外見ではあまり困っていないのだ。しかし指先は、まったく困ってしまい、にぎ

りばしのようにクレヨンをにぎって、その指は力が入って、どうしてよいのか助けをもとめている。こちこちになっていて、中指・人差し指など、ピクピクと小さくふるえているようだった。

「かっちゃん、クレヨンははなして手をハンカチーフでふいてまた持ってごらんさい、汗かいたから描きにくいのよ」と声をかけると、三月生まれのかつとしては「フーッ」とためいきをして、クレヨンを下におかずに描くように持ちなおして、次にスラスラと描き出したのだ。私が声をかけたことできんちゃんようがどけたようだった。

このようすをみて、私がカメラを向けていたり、四月生まれのよしたかをとりすわらせていっしょに描かせたので描けなくなったのだろうか、特別の条件になってしまったのだろうかと考えてみたが……。

三月生まれのかつとしては、ちがう場でもこんなことをよくしていた。ハサミで切る時も、はさみをあごの下にくっつけて考え込んでいたり、はさみを開こうとする指が、力がいりすぎて開かなかったりしたことを思い出した。

自由な画を描く時でさえ、四月生まれ・三月生まれではこのように指先の表われがちがっている、反応がちがうのだから、年長児だといって四月から三月まで、一束ひとからげで一斉に活動させていたのでは、かつとし、ゆみこのような三月生まれの子は、

とまどい、指先が動かなくなり、集団や活動のグループからとりのこされてしまう。

三月生まれは、まだまだ個人指導をいねいになくしてはならない。自由な活動の中で、個の確立を目標にしてゆかなくてはならないのだと、この絵を描くようす、指先の表われをみて感じたのだ。

指先の動きや表われで、今どんな指導が必要なのかをよみとることがができる。個人で十分に指導が必要だと表わしている子、集団で十分活動できると表わしている子とを、指先からみきわめ、よみとることができないのではないだろうか。

実験③

◎紙などを、折ったりいじったりしている時の指先の反応の比較

①三月生まれ、四月生まれをいっしょに呼んでおいて、「この折紙、あげましょうか」と呼びかけてみた。

②「うん」と返事が返ってきたところで「何でも折っていいわよ、すきなようにしていいわ」と折ってみることをうながしてみた。

◎折紙を手にし、折りはじめる時の指先の表われ、反応を観察した。

◎考察 写真 男児⑩―⑪ 女児⑫―⑬

写真 ⑮

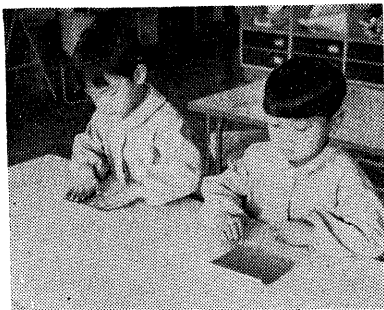


写真 ⑯

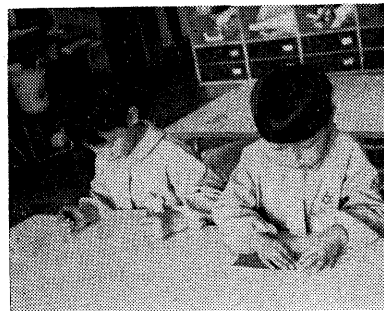


写真 ⑰

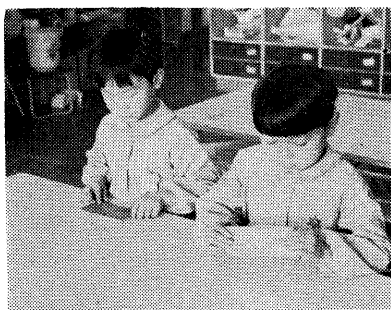
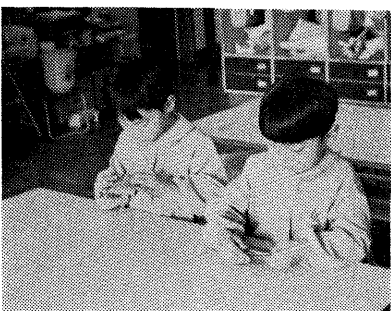


写真 ⑱



三月生まれは、手のひらをかるくにぎって、折紙はほしいが、何を折ったらよいかわからず、折ることは拒否の表われをしていた。手をにぎって体の前におき、折紙をさわろうとしなかった。折紙にさわっても、人さし指に力が入りすぎて、親指といっしょに折紙がつまめなくて、二回も三回も取りおとしていた。

男児も、三月生まれははじめにカニの足のよう折紙の上に四本の指をならべてつかみ(つまんでいるという感じ)、左右のへりを合わせていった。男児の三月生まれは、親指が拒否を表わし、人さし指となじまずにいたので、紙が人さし指と親指の間でゆらゆらゆれてしまっていた。

四月生まれは、男児も女児も、すぐ机の上で長方形に折りはじめた。指はすぐ折紙をつかみ、二枚を合わせにかかった。

五本の指がいつせいに動き出すという感じが、四月生まれの男児には表われているように思われたのだ。いつせいに、手のひら、指にスイッチが入るのが四月生まれであり、一本一本ばらばらに動き出すのが三月生まれだといってもよいような感じをうけた。

以上、三つの実験をしてみても、

◆三月生まれ、四月生まれの一年間の差を指先の表われがはっきり示していたことがわかった。どの実験でも、三月生まれは男児共に、指に力がいってしまう。これは経験の未じゆくを表

写真 ㉑

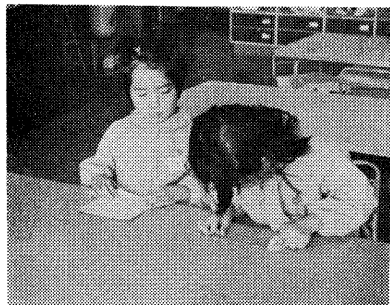


写真 ㉒

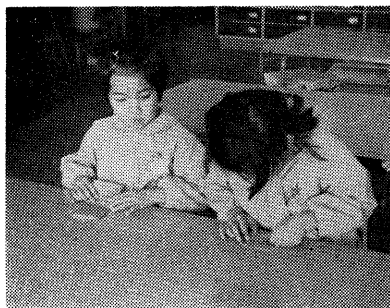


写真 ㉓

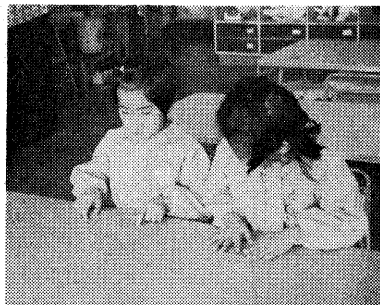
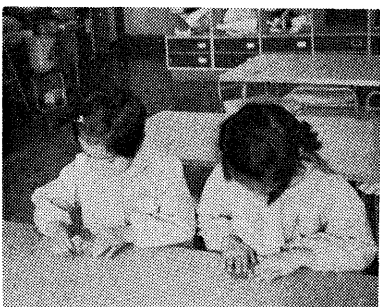


写真 ㉔



わしているのだ。

クレヨンを取る時、紙を折る時など、人さし指などは、外がわにそりかえるような力の入れ方になっているのは三月生まれであって、四月生まれは、三つの実験共に、指は手のひらの方に、まゝるみをもって動く表われをしている。まゝるみをもった指先の表われは、自信のある、そのことになっている、安心していきますという答えを私たちにつたえてくれる。

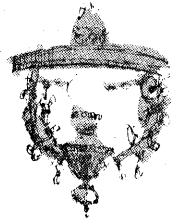
指のまがりかげん、しゅん間ののびの状態で、きんちょうの状態までが表われ、よみとれるのではないだろうか。

保育のあらゆる場で、三月生まれ、四月生まれを比較してみても、本当の指先の表われを、科学的に、心理的に観察していき、指先をみつめ、ひとりひとりの成長にまちがいのない活動の場をあたえられるようにしたいと、強く感じた。

じっとそのことをみつめ、比較することによって、表われのこまかなちがいのむずかしさと、その表われの意味するものよみとりのむずかしさと大切さを感じたのだ。

顔より、体全体より早く、しゅん間に反応する指をおいかけ、しゅん間の表われを正しくよみとるくんれんを、保育者は少しでも多くしなければならぬと思う。

(大田区立蒲田幼稚園)



ちえおくれの幼児と幼稚園

水田順子

「あなたの幼稚園には、目や耳の不自由な子はいますか？ 身の不自由な子はいますか？ ちえのおくれた子はいますか？」
考えてごらんになったことがあるでしょうか。軽い麻痺のある子、軽いちえおくれの子がいるとおっしゃる方は、少しはあるでしょう。しかし、大部分の方は、いまして答えられるのではないでしようか。

精薄児の出現率は、大体五%といわれていますから、肢体不自由児、盲児、聾児など、いわゆる欠陥児の出現率は、合わせれば少なくとも、七〜八%位にはなります。すなわち、園児数が一〇〇人の幼稚園には、七人か八人位は、何らかの欠陥を持つ子どもがいるのは、あたりまえだということです。それが、一人もいないというのは、むしろ、奇妙なことではありませんか？

八百屋に行けば、まがったキュウリや、太すぎるキュウリや、

細すぎるキュウリがあります。それが自然の姿なのだとは思いませんか？ スーパー・マーケットに行くと、大きさも太さも揃ったキュウリが、きれいに包装されて出ています。形の悪いものは、どうなってしまったのでしょうか。ただ、まがっているというだけで、ゴミ箱にすてられてしまうのでしょうか。形の悪いトマトが、ボンボンとはじき出されて、「〇〇は完全な、選ばれたトマトだけで作ったトマトケチャップです」というテレビのコマーシャルを見て、あるサリドマイド児が「ボクはあんなのは嫌いだ」といったという話をきいたことがあります。胸のしめつけられるような思いです。

大きいのも小さいのも、太いのも細いのも、きれいな形のものも、そうでないものも、完全なものも、多少どこか不完全なものも、いろいろまざりあっているのが、ありのままの、あたりまえ

の姿なのです。子どもの世界も同じだと思えます。身体の欠陥を持つた子どもやちえのおくれた子どもも、共にいるのが自然な姿なのではないでしょうか。少し意地の悪いいい方をするなら、そういう子どもの一人もいない幼稚園は、スーパー・マーケットの包装されたキュウリのように、見場にとらわれた商品みただといえましょう。しかし、これに対しては、こんな意見が出るのではないのでしょうか。

第一は、「希望する人があればいつでも入れるつもりであるのに、応募者がいません」という意見。

第二は、「特殊な子どもは、その子どもに適した特殊な教育方法があるはずだから、普通の幼稚園で教育することは、かえってよくないことだ」という反論。

第三は、「理想としては正しいかもしれないが、実際にやることはむずかしい。また、やって見たが、トラブルが多くて困った」という意見。

第一の意見から考えてみましょう。応募者がいないとおっしゃる幼稚園では、入園テストを行なっていませんか？ 何も成績の良し悪しを見るのではなくて、ただ子どもを知るためにするのだといわれても、ちえおくれやその他の欠陥を持つ親たちは、そうは受け取りません。テストをされるというだけで、もうだめかもしれないと思ひ、人数の関係で、毎年入れない子どもが出ていれ

ば、絶対にうちの子なんか入れてもらえないと思ひ込んでしまうのです。応募するまでもないとあきらめてしまします。全く、なぜ入園テストをするのでしょうか。子どもを知るためだったら、そんな短時間でできるわけがありません。入園してからゆつくりと子どもを知ればよいのです。もし入園させるにふさわしくない子どもを見つけ出すためだったら、それは形の悪いトマトを放り出すようなもので、少なくとも幼児教育者として、悲しむべきことではないのでしょうか。いろいろな問題を持つ子どもの応募を無言のうちにやめさせているのは、幼稚園自身ではないのでしょうか。

第二の意見については、ちえ遅れの幼児の保育にずっと携ってきた者として、これらの子どもたちは、決して特殊な子どもではないし、したがって特殊な教育方法があるのではない、幼児期にふさわしい生活を、他の幼児と同じように与えることが必要なのだ、ということができます。

暗闇の中を手さぐりでそろそろ歩いているうちに、ほんのりと明るくなり、次第に夜が明けて、あたりがはつきりと見えてくるような、そんな経験を、幼児期にするのではないのでしょうか。たとえば、今まで、お風呂に入れてもらったり、手を洗ってもらったこと、お母さんに罵っていた水が、幼稚園では自由に使うことができ、いつまでも流れていくのを見て楽しんだり、砂場に満たして池を作ったり、ホースでまいたりすることが

できます。そして、水はだんだん子どもにとって親しいものになり、水は子どもの新しい世界になります。幼稚園には大きな紙やたくさんの絵の具があります。何となくふれてみると、赤い線ができてびっくりします。もう一度やってみると絵の具がたれて、まるで競争しているように見えました。おもしろくなって、どんな描いてみます。ワクワクするよううれしさが、身体いっばいに込み上げてきます。そうして、描くということも、子どもの新しい世界になっていくのです。プランコヤ三輪車の取り合いは、白いモヤの向こうにぼんやりと見えていた他の子どもの姿を、はつきりとした光の中で見せてくれることなのでしょう。

幼稚園は、子どものために用意された子どもの探検場所のようなものです。子どもは、ここでは自由に好きなものにふれ、好きなことをためして、自分のまわりの新しい世界に足を踏み入れ、自分自身の夜明けを感じることができるのです。ちえのおくれた子どもであってもそうでなくても、また何らかの欠陥を持った子どもであっても、皆等しく、子どもは子どものために用意された場所で、十分に一歩一歩をためし、たしかめながら成長していくことが必要であり、その用意をするのがおとなの役目なのではないでしょうか。

幼児教育とは、子どもの自然に伸びる力を借すことであるといわれています。どの子どもにも、自然に伸びる力はそなわっ

ています。その子どもがおくれているからという理由で、また欠陥があるからという理由で、その子どもが自然に伸びる力を持っている時期に、それに手を貸すことを躊躇したり、恐れたりする必要はないと思うのです。子どもは各々その子どもなりに、一歩ずつ自分の世界を開いていくのですから、どんな子どもに対しても、その子どもなりに見守って、その子どもが必要な時に手を貸すことができればよいのではないのでしょうか。子どもの持つている欠陥に対しては、将来、それがハンディキャップになることが少ないように、治療なり訓練なりが必要な場合は、もちろんありますが、その治療や訓練は、子どもにとってはほんの一部分であって、他の子どもと変わらない、幼児らしい生活をするのが、その子どもの人としての成長に必要なことだと思います。

第三の意見について考えてみましょう。実際に障害を持った子どもを、クラスの中に入れて保育しておられる先生方を知っています。そして頭の下がるようなすばらしい実践をされている先生も、多くあります。しかし、一人の先生の努力だけでは、どうにもならない——園長や、他のクラスの先生方、父兄の理解などもなければ、結局どうにもならない場合が多いことも知っています。

幼稚園全体として、障害のある子どもでもいっしょにやっていくことは何でもないことだという理解があれば、ほんとうに何でもないことであるのに、そうでなければ、担任の先生は子ども

との間の板ばさみになって、とても大変です。しかし、それでも、いろいろな子どもがいてあたりまえなんだ、ちえおくれの子でも、その子なりにそれでよいのだということを皆にわからせることができるのは、実際に保育をしている先生以外にはないのです。

ある幼稚園では、リトミックがとてもさかんで、クラスごとにできを競う風潮がありました。一人のちえおくれの子どものいるクラスを受け持った先生は、先生個人としてはとてもよく子どもを受け入れて努力をしていましたが、その子どものために、リトミックがそろわないといって、父兄から非難を受けたのです。リトミックは、クラス全員が間違えずにそろうことが大切なことではないということくらい先生は知っていました。父兄の非難に敢然としているには、とても勇気がいると語っていました。

またある幼稚園では、あまり部屋が泥だらけなので、どうしたのかと尋ねると、「この辺はアパートに住んでいる子どもが多くて、幼稚園に来ると、一日中泥んこ遊びをするのです。それでもたりになくて、部屋の中にまで持ち込むのですよ。でも、この子たちには、今、これが一番必要なのだから、やらせておくのです。でも、二学期ごろになると、自然に別の遊びに移りますからお部屋もきれいになりますよ」と笑っていました。こういう理解をされる幼稚園では、ちえおくれの子どもも自然に受け入れられています。

例をあげだせばきりがなくありますが、このふたつの例

でもわかるように、子どもをどう理解しどう受け入れるかで、一方は困ったと思い、一方は何でもないことだと思ふのです。困ったこと、困った子ども、はみ出してしまふ子——それらは子どもに問題があるのか、それとも、私たち自身の視点に問題があるのかを、ふり返ってみる必要があるのではないのでしょうか。

クラスとしてのまとまり、クラスとしての生活を重んじるあまり、うっかり一人一人の子どもの気持ちを忘れてしまうと、そこからはずれる子どもは、困った子と思ってしまうのではないのでしょうか。逆に、一人一人の子どもが、幼稚園の生活の中で、十分に満足して、のびのびとたのしむことができるように先生が手助けをすれば、自然にクラスとしての調和が生まれてきます。ちえおくれの子どもでも、その子どもなりにその中で調和していくことができます。そして、そのようにたとえ欠陥を持った子どもでも、何でもなく自然に皆の中で交わっているさまを見て、まわりの先生や父兄も、納得できるのでしょう。

ちえおくれの子どもと幼稚園の問題は、子どもの方の側からではなく、幼稚園の側から考えられるべき問題です。もし、ちえおくれの子どもを受け入れることがとても困難であるとしたら、子どもが悪いと考えるのではなく、子どもをはじき出そうとしている保育を、はたしてこれでよいのか、ふり返って考える必要があるのではないのでしょうか。

(愛育研究所)

本 本 な な こん こん あん あん

真 守 津

秋人をめぐる人々のはなしからはじまる
書物である。

「死刑囚と盲婦人と花」「あの時から」
など、島秋人のことを読まれた方々には、
親しみ深い文章である。島秋人は獄
中でキリスト教の信仰をもつようにな
り、また歌人となって、窪田空穂に見出
され、処刑後に出版された歌集「遺愛
集」（東京美術出版）が出版されたほど
の人である。

同じく死刑囚の正田昭のことなどを含
めて、鎮魂（たましずめ）と題して、著
者がその人たちとかかわりをもったこ
ろから出発した「少年院に花を植える運
動」など著者自身の体験や感想が語られ
る。非行少年という普通人とは異なっ
た人種であるかのように思われがちであ
るが、もっとあたりまえの人間として接
してくれる人がたくさんいたら、非行に
ならないですんだであろうと思わせられ
る。

著者はさらに、家庭裁判所の判事とし
て、少年法が改悪されようとしている現
状を述べ、「政治・行政も教育や青少年
対策も、天を畏れ人間を愛惜する心に還
って出直すこと」がなければ、本当の世
の中にならないことを指摘されて、最初
の部分が終わる。

次の部分は「出会い」と題して、癩者
をはじめ、いろいろの人との出会いにお
いて「燃ゆる眼」について語られる。さ
らに「人間の復興」という部分があり、
最後に著者の俳句を集めた「春夏秋冬」
がついている。

この書物には「自然と人生の事実」学
ぶ」という副題がついているように、自
然と人生の前に、人が自らを低くして向
かう態度が貫かれている。人間や自然
を、人が自分の手で思うようにできると
思うところに、現代の病根がある。幼児
教育においても、同様であると思った。

「人間の復興」

森田 宗 一著

「人間の復興」（雷鳥社）と題して、

森田宗一氏の最近の論文を集めた本が出
版された。私が直接おはなしをうかが
い、また、この雑誌でも昭和四十年六月
号に書いていただいて反響をよんだ、島

「北欧・東欧・西欧幼児 施設見学・旅行記」

松村 光子著

まるで自分が旅行をしているかのよう
に、たのしくよむことのできる旅行記で
ある。そしてまた、筆者の事物にふれる
根本態度がよくあらわれていて教えられ
る。「やっぱり……でした」「意外と……
……ではなかった」というような先入意識
をもたない態度。「決定づけた言葉や表
現をさけて」「そこで新たに考える」と
いう姿勢と著者はいわれる。それは幼児
教育にとって、とてもたいせつなみかた
だと思つた。しかもそれに徹することは
むずかしいことである。著者はその態度
に徹して、この旅行記を書かれ、しかも
人間性の豊かさを思わせるユーモアと、
詩的な觀察をまじえて、各国のようすが
目の前にあらわれてくる。私は今まで世

界旅行記をおもしろくよんだ経験がなかつたので、この旅行記ははじめての経験だった。各国の街の午前七時の風景はすばらしい描写である。日本の幼稚園の園長でもあり、保育者である著者の目からみた、各地の幼稚園、保育所の実際は、教科書からは得られないものを伝えてくれる。しかも心から子ども好きな人であることを、全篇をよんであらためて知らされた。

実は、この書物のことを知つたのは、十二月二十三日に、この著者の同級生であつた赤間峰子さんとはなしをしているときであつた。赤間さんは、こんどから「幼児の教育」誌の編集業務をしてくださる方である。その翌朝未明に、著者は自宅の焼失とともに亡くなられた。その日に私はこの書物をいただいできて、一行一行読みそのことを考えつづけた。いま私はできるだけ客観的にこの書物を紹介しようと思つてゐる。

この旅行記は、客観的な記録であろうか。著者が最初からきめた見方をもつていないという点で客観的といつてよいと思ふ。自己を透明な鏡のようにして、しかも強い好奇心をもつて、新しい事物を見ておられる。そこに生まれた旅行記は、この著者でなくては書けないものである。この人の眼と筆によつて一貫している。

その日の朝早く、私は焼けた柱をみつめて立つてゐた。細い月が真黒な夜空に光のかげをつくつてゐた。

夫君である松村康平氏（そのとき、大
学で仕事をしておられた）はいわれた。
外に出ようと思えば出られたのです。
この著者には、幼児教育の面で、これ
からたくさん仕事をしていただきたか
つたことであらためて思う。人はまだたく
さんのことができるときに死ぬ。たくさん
残して死ぬほど、私は、それは神が必要
とされて召された証拠であると思つた。

遊び場のあり方



塩川寿平

一 遊び場とは何か

子どもの生活時間、生活空間を考える時、遊び場の持つ役割は重大なものである。子どもの生活の大半が遊びにあるといっても過言でないからである。特に就学前の児童にとっては睡眠・食事・排泄をのぞけば、残りはすべて遊びによって構成されているといえる。

ところで遊びについて子どもたちに聞いてみよう。トンネル作りとか、鬼ごっことか、トンボとりと答えるだろう。またおとなに遊びについて聞いてみよう。マージャンとか、ダンスあるいはお酒を飲むことと答えるだろう。ここでわれわれは重大な相違に気がつかなければならない。

それは、おとなの遊びが仕事に対しての遊びであり、余暇とか

休息であるのに対して、子どもの遊びは目的そのものであり、真剣な生活であるということである。たとえば、子どもが砂場でトンネルを作っている。誰かがそのトンネルをけとばしてこわしたとしよう。おとなが想像もできないほどすごい剣幕で、子どもは例外なく怒りだす。それは余暇とか休息という活動ではなく、真剣な生命活動が行なわれているしるしである。

おとなは仕事の中で自己の能力や才能を出し、自己を完結させ、生きがいを味わう。子どもは遊びの中で自己を実現させ、完結する。それゆえ、子どもは遊びの中で生きていく。いいかえるなら、子どものすばらしい生き方とは、いかによく遊んだかということだといいい切ってもよいだろう。

ところで、おとなの遊びと子どもの遊びの違いはわかった。だが子どもには勉強があるではないか。勉強と遊びの関係はどうな

っているのかと問われるかもしれない。このことについて私はこう考えている。いわゆる勉強、たとえば受験のための、知識のつめ込みをさして勉強というのならば、明らかに遊びと区別されるだろう。だが自発的に取り組み、創造的に考え、そして真理の探究と体験から、喜びを味わう行為をさして、勉強というならば、それは遊びと同義だといえるだろう。

元来、乳幼児にとって勉強とは、遊びの一形態なのだと思はう。たとえば、子どもがトンボをとうろうと、全神経を指先に集中して輪を描きながら、そっと近づく。この時、子どもは自発的に課題に取り組んでいるのであり、逃がすまいと創造的に考えているのである。その過程は真理の研究であり、体験である。乳幼児は真理を抽象概念から学ぶのではない。具体的な行為の中で学ぶのである。どうして逃げてしまったのか。いったいトンボはどうしてとぶのか。何からトンボになるのだろうか。次々と子どもは遊びの中で考え始める。それは真の勉強の姿であり、子どものいきいきとした生活なのである。

そこで、まず『遊び』について定義するならば、「遊びとは、子どもの人格活動としての生活である」といえる。次に本稿の遊び場について定義するならば、「子どもの遊びを具体的に保障し、積極的に援助する生活環境条件である」といえるだろう。

そこで次に、今日の都市化現象の中で、特に遊び場を論じなければならぬ重要性・緊急性について考えておこう。

二 都市化現象と遊び場

子どもにとって遊びが、不可欠の生活環境条件であることはわかった。だがもし近隣に十分な遊び場があるならば、特に今日的課題として取り上げるにはおよばないだろう。しかし現実には都市化現象の中で、子どもの遊び場はなくなっているのである。そこに本稿の使命がある。

いつごろから遊び場は、なくなっていくのだろうか。それはなぜなのだろうか。

遊び場を考える場合、私たちは当然社会・経済の側面を考えないわけにはいかない。なぜなら、遊び場とは元来、自然の野山であり、町の空地であり、道路であったからである。

高度経済成長政策の始まった昭和三十五年を境にして、経済成長最優先の攻勢は、子どもたちの生活の場であった遊び場を、経済成長の具として取り上げていった。何らの法的裏付けのない、無防備状態にあった子どもの遊び場は、たちまち姿を消していった。かろうじて残ったものは、都市公園法や児童福祉法によっていた遊び場である。

すなわち、子どもたちが歩いていけた野山は、すべて工場群や住宅群に変わってしまったし、町の中にあつた空地には見上げるような高層ビルが建つたのである。道路は交通戦争という言葉が示すように、近年は毎年正確に一万六千人以上を殺す、危険な場

所と化してしまつたのである。当然子どもたちの行く場所はなくなつてしまつたわけである。

もう少し詳しく遊び場の失われていく姿を考えておこう。昭和三十五年以降、経済成長のかけ声と共に、わが国の産業は労働力を求めて都市に急速に集中しはじめた。さらに産業は発展するにつれ農山村の労働力を吸い集め、人口の都市集中化を促進したのである。同時に必要にせまられ輸送機関の巨大化が進み、今日の交通手段の代表として自動車道路にあふれたのである。もともと日本の道路は人間が歩くために作られたものであったから、人間の方が一方的に被害者になつていった。産業集中と人口集中及び輸送機関の巨大化という三重の攻勢の前に、都市の土地はなくなり、地価は狂気の値上がりを経ていったのである。また一方、自分自身の住む、宅地さえ入手できなくなつた一般市民にとつて、子どもの遊び場が、眼中に入らなくなつたのは当然の帰結であつた。

その結果が、第1表、第2表、および第3表である。

第1表についてみると、児童一人当たりの遊び場面積は一坪に満たないことを物語っている。

第2表についてみると、わが国都市の生活環境が、欧米にくらべてきわめて貧弱であることがわかる。

第3表は、そうした貧弱な環境の中で、都市の少年たちの成長が、すでにゆがめられている事実を示している。

第2表 都市の人口1人当たり公園面積の比較 (昭和38年)

都市名	国名	面積(m ²)
ワシントン	アメリカ	45.2
ニューヨーク	アメリカ	11.9
シカゴ	アメリカ	7.9
ロンドン	イギリス	9.2
パリ	フランス	8.9
ウィーン	オーストリア	26.7
チューリヒ	スイス	6.4
フランクフルト	ドイツ	9.1
アムステルダム	オランダ	14.1
モスクワ	ソビエト	10.9
神戸、名古屋		2.7
東京(区部)		0.7
大阪		1.1
京都		1.2
横浜		2.1
北九州		2.9

資料：日本緑地公園協会「公園緑地」

Vol. 24, No. 1

第1表 200都市の遊び場状況 (昭和40年3月1日)

(1)

人口1万人当たり遊び場数			3.1カ所
児童公園(A)	児童遊園(B)	その他の遊び場(C)	
0.5カ所	0.7カ所	1.9カ所	

(2)

児童1人当たり遊び場面積			2.82m ²
(A)	(B)	(C)	
1.87m ²	0.27m ²	0.68m ²	

(3)

人口1人当たり遊び場面積			0.74m ²
(A)	(B)	(C)	
0.49m ²	0.07m ²	0.18m ²	

資料：全国社会福祉協議会「子どもの遊び場充足状況調査」

調査期日：40年3月1日

調査対象：全国556都市と東京23区

調査方法：各社会福祉協議会でアンケート式郵送調査

200都市人口：19,062,573人

200都市児童数：5,027,061人(但し0~14才)

200都市遊び場数及び面積：

児童公園(A) 942カ所 9,388,987m²

児童遊園(B) 1,313カ所 1,376,199m²

その他の遊び場(C) 3,606カ所 3,410,419m²

A+B+C 5,861カ所 14,175,605m²

第3表 人口集中地区と非集中地区の差
1 (男子)

(昭和39年)
2 (女子)

年齢 区分 種目	10					11					12					13					14				
	人口 集中 地区	人口 非集中 地区	人口 集中 地区	人口 非集中 地区	人口 集中 地区	人口 非集中 地区	人口 集中 地区	人口 非集中 地区	人口 集中 地区	人口 非集中 地区	人口 集中 地区	人口 非集中 地区	人口 集中 地区	人口 非集中 地区	人口 集中 地区	人口 非集中 地区	人口 集中 地区	人口 非集中 地区	人口 集中 地区	人口 非集中 地区					
身長	※※※※	※※	※※	※※	※※				※	※	※	※													
体重	※※	※※	※※	※※	※※				※	※	※	※													
胸囲		※			※				※	※										※					
座高		※※	※	※	※				※	※										※※					
50m走			※※						※	※										※※					
走り幅とび																				※※					
ソフトボール	※※																			※※					
投げ																				※※					
ハンドボール			※		※															※※					
投げ懸			※※		※				※											※※					
ジグザグドリ																				※					
ブル																				※					
連続さか上がり		※※							※	※										※					
持久走					※※	※※														※					
運動能力テスト					※	※														※					
との総合得点	※※				※※	※※	※													※					
反復横とび	※※				※※	※※		※												※					
垂直とび	※※				※※	※		※												※					
背筋力																				※※					
握伏臥上体	※※	※							※	※										※※					
そらし	※※	※							※	※										※※					
立位前屈			※※	※	※	※	※	※	※	※										※※					
踏み台昇降	※※	※※							※	※										※※					
踏み台昇降									※	※										※※					
踏み台昇降									※	※										※※					
踏み台昇降	※※								※	※										※※					

(注) ※※印は99%の信頼度で、※印は95%の信頼度で、その印のある地区がすぐれていること、両地区とも無印の場合は両地区の間に差があるとはいえないことを示す。
(注) 人口集中地区……昭和35年、総理府統計局が設定した国勢調査区(1調査区は平均50世帯、全国で約45,000)のうち、原則として人口密度の高い調査区(1 km² 4,000人以上)が市町村内で互いに隣接して、昭和34年10月1日現在人口5,000人以上の地域を構成している場合をいう。
資料：文部省「青少年の健康と体力」昭和41年度版

三 保育環境としての遊び場

遊び場

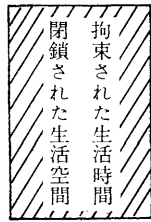
わが国の大多数の乳幼児はその最初の集団生活を保育所または幼稚園で始める。乳幼児期の発達が特に大切なだけに、保育環境としての遊び場(屋外保育施設)が果たす役割は実に大きい。だが、一般の遊び場がさきに述べたごとく貧弱な状態にある時、屋外保育施設だけが例外であることとはない。

今日、全国の半数に近い保育所、幼稚園は、自園で運動会を開催できないという。そのことは日頃の保育の中で練習ができないということであり、十分な遊びが行なわれていないことを示している。さらに重大なことは、運動会が

一日だけのショーとなり、日々の保育の集約としてとらえられていない事実である。

ここで保育施設として遊び場を考察するにあたって、二点について特に留意しなければならない。それは物理的条件である園児の生活時間と生活空間である。遊びはこの二点を無視して成り立たないし、またこの二点に強く拘束される。

まず園児の生活時間について考えてみよう。保育所の場合原則として一日八時間であるが、現実には両親の残業と交通事情の悪化のためしばしば延長される。幼稚園の場合は、原則として一日四時間であるが、家庭に帰ったとしても、近所に適当な遊び場は少ないので、園生活の時間が屋外遊びの主となる。



第1図 物理的条件による生活時間、生活空間の拘束性、閉鎖性

通常一歩も
出ることはない

園児の生活は
この中で満たされ
なくてはならない

次に生活空間について考えてみよう。園児は、朝登園して園内に一歩ふみ入れると同時に、退園の時間まで一歩もよそに出ることなく、園内において生活を送るのである。特に保育所においては夏休み、冬休みはなく一年間の生活がその空間内で営まれる。

例外として園外保育が考えら

れるが、これはあくまでも例外である。なぜならば実際問題として、毎日園外保育ができるものではないからである。また園外施設、たとえば公園などは一般の人々と共に使用するのであり、園児が自由に独占することは許されず、園内の施設と同質に扱うことはできない。すなわち、園児の生活は第一図の示すごとく、一定時間、一定空間において営まれるのである。

それゆえ、保育施設の遊び場は、乳幼児期の発達および人格形成を十分満たしうる環境条件を備えていなければならない。またわれわれ保育者はそのためにできる限りの努力を続けなければならないといえる。豊かな環境と貧弱な環境では、乳幼児の人格形成を決定的なものにする。もし、貧弱な環境を放置するならば、それは「檻」と呼ばれるであろう。

四 遊び場の重要性と問題提起

保育環境は大別すると①屋外保育施設（遊び場、園庭）②屋内保育施設（園舎）③園を中心とした地域社会、に分けることができる。本稿においては、さきに述べた都市化現象の中で、特に重要性かつ緊急性を要する①について考察を進めてみる。

鯉坂二夫、寛田知義らは、「現在の都会地などでは、幼児の生活はその社会環境により、屋外での活動が非常に少ないものになっている。そのために屋外の活動で養成されるであろう諸能力が十分に発達していないということも考えられる。たとえば交通事

情などによる危険のため、屋外で全然活動できない幼児もあり、また自然環境なども皆無にひとしく、植物や動物などにはほとんど接する機会がないという幼児の生活もある。かかる状況から、保育施設においては、屋外での幼児の活動を特に重視して、活動の場所を屋外で十分に与えていかなければならない」(資料・鶴坂二夫・寛田知義ほか「保育学概論」ミネルヴァ書房、昭和四十三年一一八頁)と述べ、今日の課題として指摘している。

さきに述べたごとく、今日の都市化現象の中でも、地価の騰貴は激しく、ややもすると遊び場の造成あるいは拡張などは、論ずることすら許されなにかのごとくである。だが太陽を浴びず、大地を走らず、屋内のみにとどまることは、乳幼児の発達にとって重大な誤りをおかすことになる。

ここで著者の行なった臨床観察、および保母、園長との話し合いによる研究を報告しておこう。第4表は(A)きわめて狭い遊び場(屋外保育施設)の保育所五カ所、(B)きわめて広い遊び場の保育所二カ所の概要である。(A)(B)両者の顕著な現象をまとめたわけであるが、もちろん(A)に見られる弊害現象の原因がすべて遊び場の不備に起因するとはいえない。園児の家庭での生活にも原因があるであろう。また、園における保育の進め方にもよるであろう。また、保母の保育技術が未熟である場合も考えられる。だが、(A)(B)を比較検討する時、遊び場の環境条件と園児に見られる弊害現象の間に、高い相関関係があることを認めざるをえない。

なお、原因の理論的検討は、来月号の遊び場のあり方(第二回)「遊び場の本質的価値」の中で行なうこととし、ここでは現象を報告し、遊び場考察の問題提起とする。

表4の注

注1 園名について公表を希望せず、匿名を希望したので、特に記号化する。

注2 設置主体は公立、私立であるが、すべて認可施設である。

注3 所在地については注1の理由により詳細に明記できない。

注4 定員については、認可定員と実在数がくいちがうので共に

明記する。実在数については著者が各クラスの実在数を実際に

点呼したものであるが、なお十ー五の誤差がある。

注5 実際に遊べる広さの実測である。

但し(イ)遊具およびプール、花壇の面積は加える。

(ロ)道路と園舎の間などにある実際には入ってはならない場所(死地)の面積は除く。

注6 臨床観察は雨天の日も行ない、主に雨が降って屋外に出られないことをどう感じているか観察した。観察時間は毎回、午

前は九〜十一時、午後は二〜四時の約二時間である。

特記：(A)群については、狭い園庭に、ブランコ、スベリ台、ジャ

ングルジム、砂場、プールなどがあり、ますます広場が狭くなり、

いずれも二五米の直線コースがとれず、円形にコースをと

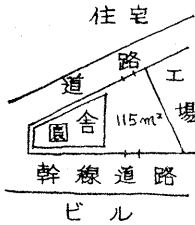
ってもカーブが強く、したがって園児は二五米の全力疾走をし

たことがない。また試みたくとも不可能であった。

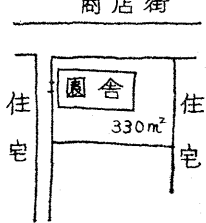
第4表 (A)(B)園児の臨床観察および保母・園長との話し合いの資料

条 件	園 名 注1	設 置 注2	所 在 地 注3	定 員 注4		屋外保育施設の広 さ(実際に遊べる 広さ) 注5	備考 注6 1) 観察月日時間 2) 観察回数 3) 保母との話し合い
				定員	実在数		
(A) きわめて狭い屋外保育施設の保育所	Si	区立	東京都 渋谷区	105人	約 110人	300m ² (約90坪)	1) S.44. 5.13~17 午前中 2) 5回 3) 5回
	T	私立	東京都 板橋区	76	約 85	180m ² (約55坪)	1) S.44. 6.24~27 午前中 2) 4回 3) 4回
	K	私立	東京都 練馬区	80	約 100	115m ² (約35坪)	1) S.44. 6.24~27 午後 2) 4回 3) 4回
	H	私立	静岡県 富士宮市	90	約 250	330m ² (約100坪)	1) S.44. 9. 1~5 午後 2) 5回 3) 5回
	M	市立	東京都 三鷹市	70	約 80	130m ² (約40坪)	1) S.44.10.14~17 午前中 2) 4回 3) 4回
(B) 施設の広い屋外保育	Sa	区立	東京都 中野区	60	約 65	600m ² (約180坪)	1) S.44.10.27~30 午前中 2) 4回 3) 4回
	N	私立	静岡県 富士宮市	90	約 120	6,600m ² (約2,000坪)	1) S.44. 9. 1~5 午前中 2) 5回 3) 5回

[K]

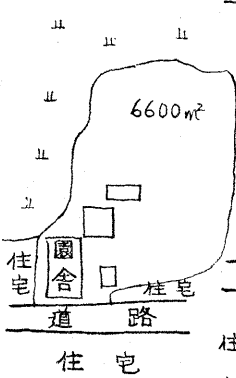


[H]

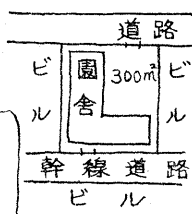


第2図 略図

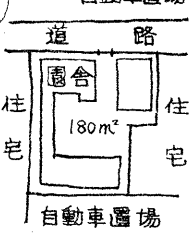
[N]



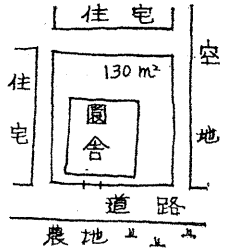
[Si]



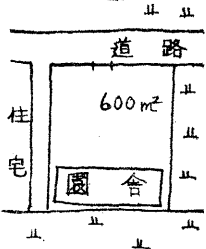
[T]



[M]



[Sa]



(A) (B) 園児の臨床観察及び保育，園長との話し合いによる高頻度現象

(A) きわめて狭い遊び場（屋外保育施設）の保育所	(B) きわめて広い遊び場（屋外保育施設）の保育所
---------------------------	---------------------------

(1) 心理的な現象

(A)	(B)
1) 元気がない子が目立つ	1) 元気の良い子が多い
2) 教室の中ばかりにとじこもる	2) 自由遊びの時間になると全員外にとび出す
3) ふきぎこむ子が多い	3) 顔の表情がいきいきとしている
4) いつも遊びたらないと不満をもらす	4) 自主性がある
5) 自主性に欠ける	5) 創造的である
6) 造形の時など創造性に欠ける	
7) 神経質	

(2) 社会的な現象

(A)	(B)
1) 人間関係が上手にとれない	1) 人間関係がよい
2) 友だちがない	2) 友だちができる
3) おもいやりが少ない	3) おもいやりがある
4) 約束（ゲームのルール）を守らない	4) 外遊びになれておりルールを強く守る

(3) 自然学習上の現象

(A)	(B)
1) 動植物の育成が十分にできない 2) 草花の観察が雑 3) 絵に描く時、形式化された花を多く描く 4) 植木鉢栽培ばかりでダイナミックな感動がない	1) ヒマワリやアサガオを自分たち一人一人が園庭に植える 2) 草花の美しさにおどろく 3) 絵にいきいきとした自然を描く 4) 風でヒマワリが倒れたり枯れたりすると非常に悲しむ

(4) 体育, 保健的な現象

(A)	(B)
1) 肥満児やもやしっ子が多い 2) 顔の色につやがない 3) 風邪をひきやすい 4) 消化不良の子がいる 5) 昼寝の時、なかなか寝つかない 6) 全力を出しきる運動が少ない 7) ねばりがない 8) 朝集会の時10分位で倒れる子がいる 9) 手足の運動が不器用 10) 大きいケガが多い	1) 肥満児は一人もいない 2) 顔の色にかがやきがあり, つやがある 3) 風邪をひくことが少ない 4) 消化不良の子が少ない 5) 昼寝の時すぐに寝つく 6) 力を出しきって遊ぶ 7) 忍耐力がある 8) 朝の集会で倒れる子はいない 9) 運動神経がよく発達している 10) ケガが少ない

(5) 精神医学的な現象

(A)	(B)
1) 頭痛やどうきを訴える 2) 関節の硬直などがおきる 3) 咳の発作がみられる 4) 自家中毒をおこしやすい 5) キンキンヒステリックに騒ぐ	1) 頭痛やどうきを訴える子はいない 2) 関節の硬直などが無い 3) 咳の発作の子はいるが少ない 4) 自家中毒の子は少ない 5) 騒いでもヒステリックではない

(6) 保育技術上の現象

(A)	(B)
1) 園外の道路へ出て遊びたがる(逃げださないように門に鍵をかける) 2) ボール遊びのボールが園外へ出る 3) 狭くてつまらないと外へ出ない 4) 園児が歓声をあげて遊ぶ時、他のクラスの教室内の保育に気がねしてやめさせる	1) 園外へ出てしまうことはない 2) ボールはいくら投げても園内に落ちる 3) よろこんで外に出る 4) 歓声をあげてゲームに熱中している 5) いつでもブランコや他の遊具が使える 6) 三輪車の乗り方をくふうしてどんな乗り方をしてもよい

5) 皆が外に出ている時は危ないので、ブランコを使わせない	7) 全園児がいっしょにマスゲームできる
6) スピードが出て他の子とぶつかるので、三輪車を片足こぎさせない	8) 毎日外遊びをする
7) 全園児がいっしょに外で遊んだり遊戯をすることができない	9) 園内で運動会が開ける。また十分練習もでき、高度な技術を身につけられるので喜びも大きい
8) 交代で外遊びをするので、一日外に出られないこともある	10) プールは大きいので先生も共に入って泳ぎを教えることができる。夏の終わりには10mを泳ぐ子が何名か出る
9) 園で運動会も練習もできない	11) 皆元気に外で遊ぶ
10) プールは小さいので泳げない。小さすぎて先生は外で声をかけるのみ	12) 場所とりのケンカはないが、他の理由では激しいとっくみあいのケンカをする
11) 激しい運動をする子がいると弱い子は教室へは行ってしまふ	13) 室内、室外の保育カリキュラムの調和がとられる
12) 場所とり遊具とりのケンカが多く、それに伴う事故がある	
13) 室内中心のカリキュラムが多い	

(7) その他の現象

(A)	(B)
1) 雨が降った日、屋外に出られなかったがたいして苦にしない	1) 雨が降った時、みな残念がって、てるてる坊主を自主的に作った。年長のクラスではどうしても出たいといって保母を説得し傘をさして園庭を一周した
2) 足にケガをしても屋外に出ることができない子がいても別に悲しまない	2) 足にケガをした子がいたが屋外保育に参加したいといつて泣きべそをかいた
3) 非常におしゃべりだが、季節に関する園児の話は少ない	3) 園児の話の中に、春夏秋冬の話が出る
	4) 保育技術が高くないと園児に逃げられると同時に、一保母の受持ち児童数を年長(5, 6歳)で20人程度にしてほしいという声がつよい

以上の現象が臨床観察および保母、園長との話し合いにより提示されたわけであるが、今園児の上に起こった現象をとらえることによって遊び場の環境条件の優劣の差が保育効果の上で大きな影響を与えていることがわかる。すぐれた遊び場においては、人格形成上から見てよい結果が見られるし、劣った遊び場においては、悪い結果が見られる。このことは、ますます野原や空地の失われていく都市化の中で遊び場の重要性を今日の課題として強く問題提起している。ここで強く認識しなければならぬことは、もはや遊び場は「自然にあるもの」から「われわれがつくるもの」になったということである。

(小田原女子短期大学)

オメツプについて



西 本 脩

オメツプ (OMEP) というのは、フランス語の Organisation Mondiale pour l'Education Pré-scolaire のかしら文字でできた略語で、日本語に訳すと「世界幼児教育機構」となります。

オメツプは、受胎のときから八歳ごろ

までの子どもの発達のすべての面に関心を持ち、世界じゅうの教育学者・小児科医・教師・看護婦・精神医学者・心理学者・政府と地方庁の官公吏・ソーシャルワーカー・両親らによる集会の準備をしています。

そのおもな務めは、八歳以下の子どもについて、理解をいっそう深めるよう促し、人格形成期の幼児の研究から得た経験や知識を、異なる国ぐにの間で分け合うことです。

オメツプは、幼児教育の研究を進めることを目ざしています。「教育」ということばは、ここでは、誕生からおおよそ七、八歳までの子どもに及ぶ、すべての影響をさすものとして、最も広い意味で使われています。オメツプは、育児・住宅・遊び場・保育所・幼稚園・小学校への移行・子どもの病院看護・おもちゃと遊具・子どもが住む近隣地区・異なる文化や国際的な変異の影響などの問題に関係し

ています。

多くの違った職業の人びとが、オメツプの会員になっています。その中には、心理学者・教師・ソーシャルワーカーばかりでなく、建築家・行政官・作家らもはっています。というのは、オメツプは、幼児の幸福と発達に関心があるすべての人びとを、一つに集める努力をしているからです。

オメツプは、世界の子どもが幸福な幼年時代と家庭生活を送れるようにもり立て、ひいては、世界各国の間の理解をいっそう深め、世界の平和に貢献することを目ざしています。

オメツプは、いろいろな職業の人びとや団体に対して、このような目的を果たすために力を合わせる機会と見込みを作り出し、世界じゅうの違った国ぐにの違った職業の代表者らによる集会の準備をしようとしています。

オメツプは、ユニセフ(国連国際児童

緊急基金)・ユネスコ(国際教育科学文化機構)・エコソック(国連経済社会理事會)とともに協議機関の地位を占めています。ユニセフとは、子どもの発達・健康・養護について共通の関心をもち、ユネスコとは、教育や成人訓練について興味を分かち合い、エコソックとは、適切な家庭環境やよい生活条件について共通の関心をもち合っています。

オメックは一九四八年に結成され、一九六八年には、ワシントンで十二回目の世界會議を開きました。

オメックの組織は、総裁が統轄しています。今の総裁は、フランスのミアラーン氏(Prof. G. Miareu)です。この下に、副総裁が五人いて、それぞれ、地域ブロックの総裁を兼ねています。世界を、南・北アメリカ、北欧、南欧、中近東・アフリカ、豪州・極東・太平洋地域の五つの地域ブロックに分け、そのどこかに属している加盟国は、それぞれオメ

ック国内委員会を組織しています。

ワシントンの第十二回世界會議の総会で、オメック憲法の改正が行なわれ、従来隔年に開かれていた世界會議が、今後三年に一回開かれることになり、三年間同じテーマで、一年めは、それぞれの加盟国が国内會議を開き、二年めは、地域ブロックごとの地域會議を催し、三年めには、それらの成果を持ち寄って世界會議を開催するという「積み重ね方式」がとられることになりました。

この決定にしたがって、わが国では、一昨年十一月に初めて、第一回オメック国内大会を玉川大学で開き、また、昨年の十一月には東京文化會館で、初めての豪州・極東・太平洋地域大会を催し、フィリピン・タイ・韓国・日本・それに客員としてカナダの代表が加わり、「遊びの教育的役割について」を主題として意見をかわしました。これらの結果を、本年夏ボンで開かれる世界會議にもって行

くことになっています。

オメックの第十三回世界會議は、「幼年期における遊びの教育的役割」というテーマのもとに、ことしの八月五日(木)から八月十一日(水)まで、ドイツ連邦共和国(西ドイツ)の首都ボンで開催されることになっています。

わが国の幼児保育界も、オメックの精神を生かし、いろいろな職業や団体の入びとが、幼児のしあわせのために力を合わせ、国際的な視野から研究を進め、発展させていきたいものです。

オメックの沿革・加盟国・日本との関係などについては、左記の拙稿を参照してください。

西本脩「幼児教育機構第十二回世界會議報告」(「幼児の教育」第六十八巻 第一号)昭和四十四年一月フレイベル館

*

四月幼稚園の新年がはじまる

幼稚園にはいる前の子どもは、友だちがいたのしそうな幼稚園にはいれるのを待っている。子どもの絵の中に、何人もの人が手をつないでいるところがあらわれるのはこのころである。おとなと遊ぶだけではおもしろくなくて、子どもたちの中にいっしょに入ってかけまわったりままごをしたがるのもこのころである。幼稚園では友だちとあそべるといふ期待で、心がふくらんでいるのが入園前の子どもの姿勢である。

入園式の翌日から事情はかわる。友だちと遊ぶ時間がない、遊ぶきかけがない、しようど心が動くことがあっても、みんなでしなければならぬことだけで終わってしまう。

たのしい期待が破れて、幼稚園はこんなところだと覚悟がきまるまでに、一学期も二学期もかかってしまう。これは現実である。幼稚園を何とかして子どものものとしたい。

堀合文子氏のクラスの四月の最初の記録を、そのような意味で、よくご研究いただきたい。

幼児教育のどのような理論が提出されようとも、この現実を解決するのに役立つものでなければ無意味であろう。

四月からの現職研究の案内を本誌に掲載しましたが、すでに十二月より第一期をはじめています。はじめての試みですので、これからどのようになっていくかわかりませんが、着実な現場の実践に役立つものにしていきたいと願っています。

四月号より、本誌の定価が値上げになりましたが、ご理解願います。定価が値上げになれば、増頁などのサービスをよくするのが世の中の常識ですが、この雑誌では常識に従わないことにしました。印刷物や、文字のおしゃべりが多すぎる現代に、雑誌はどうあればよいのか、大きな課題です。ともかく、さしあたって、頁はふやさない方針です。

(津守)

幼児の教育 第七十巻 第四号

四月号 © 定価一〇〇円

昭和四十六年 三月二十五日印刷
昭和四十六年 四月 一 日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一

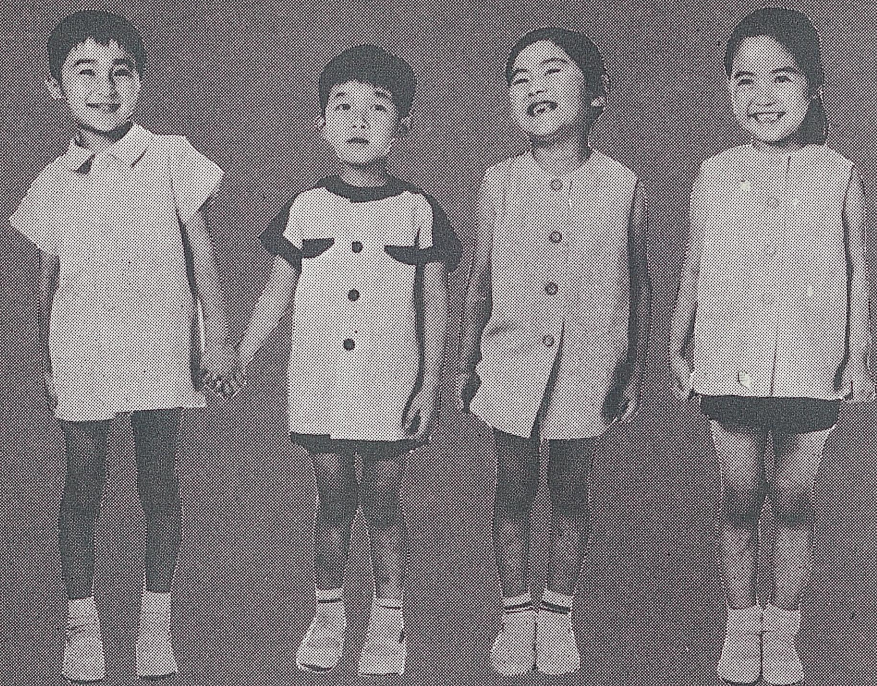
印刷所 凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
フレーベル館にお願いいたします



準備するのは今 見直されるのは夏

園の庭に桜の花が咲きそめる頃、新入園児たちの元気な顔が集まります。希望に大きく胸ふくらませて、活発に動きまわる園児たちには、春さきの冷めたい風も気持よさそう。

4月も半ばすぎれば、もうすぐ夏。人一倍汗かきの園児たちの汗とよごれは大変なもの。連日の洗たくは悩みのタネ。やっぱりナック園児服にしているとよかったと思うのもこの時。今からナック園児服・あそび着の準備を!!これならW&W性、型くずれしません。

*園児服・夏型 デザインは5種類。男児用・女児用があり、サイズは特大・大・中・小の4種類。

*あそび着 男児用・青。女児用・赤。サイズは大・中・小の3種類。

リトルカレッジ 加化成 **NUCU** ナック® 園児服・あそび着

株式会社 フレーベル館

現幼研 5月例会お知らせ

旭川市で開催

昭和46年5月9日(日)

主催 フレーベル館



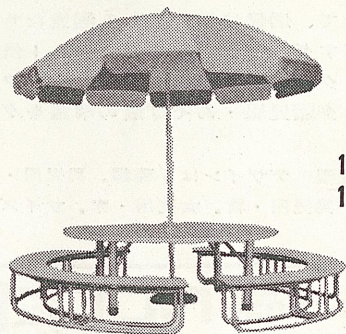
春です。戸外での保育を！

日に日に暖かさを増しているきょうこの頃。子どもたちは外にとび出たくてうずうずしています。こんな時、戸外での保育時間を有効に使いたいとお考えの先生方。キンダー保育パラソルを、ご活用ください。15～6人からの子どもたちが、円形テーブルを囲んでの、のびのびとした戸外保育。これからの夏にかけて、カラフルなパラソルのもとでの保育時間は、きっと子どもたちに喜ばれることでしょう。

*上部のパラソルは、簡単に取りはずしができ、テーブルやイスは先生お2人で楽に移動させることができます。

パラソル(傘)の色は2種類。①赤+黄、②青+黄

**キンダー
保育パラソル**



1セット
110,000円

円形テーブル…直径150cm・強力アルミ製。
 いす………4人がけ用＝4脚(16人分)木製
 座板透明樹脂塗料仕上げ・パイプ脚。
 パラソル………直径210cm。堅牢ナイロン製。

株式会社 **フレール館**